## 一四

遠藤の指定した畑中新藏の家も、遠藤のと同じくなか〳〵門戸を張り、部屋部屋もその體裁を飾つてあるが、遠藤の樣な實力がないかして、どことなく、義雄に空虛を感じさせた。床の間にかけた抱一も本物らしく受け取れない。

おほきな瀨戸の圓火鉢を挿んで、主人の新藏は義雄と相對したが、肥大なからだに肥大な聲、挨拶振りが如何にも横柄なので、この田舍者め、おれをまだ知らない、な、と義雄は第一に輕蔑の念が生じた。そして、

『實は、遠藤さんからのお話があつたので來たのですが、どうです、あの件は見込みをつけて、やつて呉れられますか？』

『見込みがあるから、お目にもかかりたいと云うて置いた。』

『なアに、僕もお宅へあがるのはわけのないことですが、これまでにいろんな計畫がすべてぐれたので、今回のも、どうせ、當てにならなければ、初めから御相談するまでもないのです。君に方針がついてゐれば、一つ、やつて見たいと思ふだけです。先づそれから伺ひたい』と、義雄の態度が普通に相談を持ちかけて行く人々の樣でなかつた。

『そりやア、君』と、畑中は少し狼狽して禿げたあたまを一つさげて見せて、『いよいよやり出せば、大事業と云はねばなるまい？　さう性急に云はないで、ゆツくり話して見ようぢやないか？』

『無論、御方針のつくことなら、御相談したいのです。』

『實は、わたくしもいろんなことをやつて見て、失敗つづきなのぢやから、さういふ突飛なことで一儲け恢復をしたいと思うてをるので——』

『では、申しますが、それも遠藤さんに話して置きましたから、大體御承知でしよう。

注意してやりさへすれば決して損のない事業です。』義雄は先づその大泊から明き屋を買ひ初め、それをそのままにつぶして船につみ込み、小樽なり、函館なり、青森、酒田、新潟なりへ運ぶ順序と手段とを說明する。そして、マオカなどは自分が實際に行つてよく知つてゐるから、種々の便利があることを語つた。

『何回にも切つてやれることぢやから、先づ、買ひ占めに一萬圓と見て、あとは船ぢや——汽船は金がかかるし、まア、うまく相談がつけば、帆前ぢやが——』

『無論、帆前船ならいいでしよう——然しそれも費用がかかり過ぎると云ふなら、少し大きな和船で間に合ひます。』

『そりや、それでもえい、なア——船の方には、關係がないことはないから、一つ、當つて見ましよう——兎に角、よく考へて見ねば事業と云ふ奴は兎角越中ふんでし的だから、なア。』聲高く『は、は、は、は！』と笑ふ。

『何がをかしいんだ！』義雄は心で矢ッ張り輕蔑をつづけ、わざと、圓い目をして主人を見守つたが、また、ほんの、おつき合ひに口だけゆるめて、微笑をする。そして『では、どうか、御熟考を』と、そこに力を入れて、『願ひたいものです。』

『承知しました——よく考へて見ましよう。』新藏はこれで用談は濟んだと思つたのか話頭を轉じて、その態度をうちくつろがせ、『わたくしも日露戰爭の時には儲けそこねました。』或筋から內命が下だつて、露領の沿海洲まで、日本ではまだ本當にやつてゐない遠洋漁業の組織で密漁船を出す計畫を、自分が仲間に這入つてやりかけたこと。密漁と云つても、軍艦が保護して呉れると同時に、その獲物は直ぐ軍艦の食糧に買ひあげられる筈になつてゐたこと。安全に利益を占め得られるのだから、汽船持ちを說きつけて、いよ〳〵出發するまぎはになつて、平和談判に終つてしまつたこと。などを語つた。

然し義雄は新藏が現在何をしてゐる男であるか分らずに引き取つた。

義雄はそこを出て北海メール社へ行き、自分の歸札を報告がてら天聲に會つた。そして、

『僅かの旅費を送つて呉れたら、釧路まで行つて來られたのに。』義雄が責める樣に云ふと、天聲は、

『なアに、僕は心配したのだ。遠藤君にも會つて聽いて見ると、帶廣までに君の爲めばかりに小百圓もかかつたから、またさう使はれたら困ると云うて、社が早く呼び返せと云ふので、あの電報を打つたの、さ。』

『社としては、初めの二十圓しかまだ出してゐないぢやないか？　それに、僕はただ一回幌泉で遊んだ切り、何も無駄な使ひ方はしなかつたぞ。』

『それはさうだらうけれど――』

『無論、君のせいぢやアないが、餘りメール社がけちだ、人のふところを目あてばかりにして、さ。――然しさう分れば、それでいいが、實を云ふと、君が帶廣へ二日間



も返電をよこさないので、癪にさわつたから、原稿を中止しようとも思つたのだ。』

『まア、さう云はずに、僕の心配も思つて呉れ給へ。それに、社長が歸れば、また何とか考へもあらうから――』

『然し、そりやア當てにならないよ。ここの社長が歸つて來れば、僕も會つて置くことは置くが、餘り勢力もなく、またけちだから、社が却つて持てないのだと云うではないか？』

『そりや、事務の方がけちなのだ。考へても見給へ、二三年間に二度も燒けて、兎に角、これだけの新築が出來たのではないか？月々の發行部數で云へは、優に毎月儲けてをるのだが、負債を返してをるのだ。』

『そんなことアどうでもいい、さ――然し、僕は僕自身の旅行中にやつて來たことだけを、君にしろ、社にしろ、正當に認めて呉れたら、それだけで先づ滿足だ――東京の一文士――僕は文士と云ふ名詞を嫌ひだが――それが、社や道廳や人の金で、諸方

を喰ひつぶしてまはつたと思はれるのは御免だから、ねえ――』

『そんなことはない――君の行つた跡、行つた跡へ新聞を無代配布もしたし、世間でも評判がえい様だ。留守中の社長代理も面白いと讃めてをつたぞ。』

『讃められるのが僕の目的ぢやアない――僕は、貧乏な社が僕に盡しただけの金錢と勞力に相當した働らきをしたと、認められればいいのだ。』

かう云ふ話をして義雄の心が多少落ちついてから、暫らく旅行中の話に移り、帶廣で天聲の名がちよツと役に立つた切り、ほかでは、決してそれを出さないで濟んだこと。旭川でも、メール支局の主任は既に陸軍演習の地に向つた留守で、却つて、反對の新聞社に紹介して貰つて、アルコール釀造場を見たこと。十勝原野や神居古潭の紅葉がよかつたこと。北海道の智識は天聲よりも廣くなつただらうといふこと、などがあつた。

『それから、思ひ出したが、浦河が歡迎會があつた時、頻りに君のことを聽いてゐた藝者があつたよ』と、義雄は天聲の顏を見る。

『誰れだらう？』天聲は得意げに首をひねる。

『月寒にゐたらしい――』

『分らない、なア――』

『おい。』義雄は應接室の椅子を立つと同時に、天聲の肩を不意に輕く叩き、『唐變木の木强漢も、なか〳〵油斷がならないぞ。』喜ばせ半分にかう云ふと、

『さう、さ』と、天聲もわざと反り身になつて、武骨な澄ましかたをする。

それから、渠は北海實業雜誌社へ行つた。氷峰は空知支廳へ出頭して留守だ。用向きを聽くと、昨日、公布された同支廳管内の山林拂ひ下げの一部を受けようとする運動だ。渠も亦いよ〳〵窮して來て一かばちかの勝負を仕出した、な、と義雄は微笑した。

雜誌の第二號も、社長の川崎がまた禿げ安の手を經て苦しい苦面の末、漸く昨日印刷

屋の手を離れると同時に、發送濟みとなつたさうだ。會計の話によると、地方の廣告料並びに雜誌代を收集すれば、樂に第二號も行く筈であつたが、氷峰が初號からさうけちな催促をしてゐては、社の體面と信用とに關するからと云つてほうつて置くさうだ。

それを會計が、頻りに川崎から小言を喰ふと云つて、こぼした。義雄も初めから氷峰のやり方を緩漫とは見てゐたが、會計をなだめるつもりで、

『まア、氷峰君の考へもあるだらうから、やらして置き給へ』と云つた。そして、自分の短篇小說『金』といふものが載つてゐる雜誌を二三部取つて、有馬の家へ歸つた。

勇は學校から歸つてゐたので、渠を捕らへて義雄はお鳥に語るべきことを間接に渠に語り、遠藤が相當な金を出して呉れたことが分ると、お鳥は直ぐこれから兄のところへ行き荷物を取つて來るから、あすからでも病院に入れて呉いと云ふ。

『それがいい、ね。』勇はお鳥に云ふともなく云つて、どことなく、もぢ〳〵して義雄の顏いろを伺つてゐたが、『それで、こないだ中から話したかつたのだが』と、急に固くるしい口調になり、然し下を向きながら、『僕も君が暫らくだと思つてとめてゐたが、ね——」

『……』いよ〳〵出たと、義雄は目をきよろつかせたが、わざと平氣で聽く風をしてゐると、お鳥の方が渠に代つて顏を眞ツ赤にして、額にしはを寄せる。

『長くもなるし、またお鳥さんが入院したら、その近處にゐる必要もあるだらうし、だ』と、勇は背を延ばして義雄の顏を見た。然し、云ひにくさうにまた横を向き、煙草にまぎらせながら、『僕の方も君が知つてる通り餘裕のある暮しではないから——さう〳〵世話もしてゐられないし——云つて見れば、まア、斷わりたいのだ。』

『よし、分つた。』義雄もはツきり答へて、『これから直ぐ僕は下宿屋を決めて來る！然し君に斷わりを云つて置かなければならないが、君の家にも隨分世話になつたから旅行前に渡したかはせだけで間に合はないかも知れないが——』

『いや、あれは出來次第返すよ。』

『返せと云ふのではない、僕の札幌滯在が長くなつたのは長くなつたが、氷峰君のところにゐた方が多いので、それでなければ、遊廓で――その多い方にもまだ禮はしてないくらゐだから、君の方も待つて貰ひたいのだ。』暗にあれだけやれば十分ではないかと云ふ意をほのめかした。

『さう惡く思はれると、困るが、ねえ――』

『惡く思ふのではない、さ、はツきりした區別は立てて置く必要がある。無論、友人としての間がらは金で勘定は出來ないが、僕に對する有形的な關係は、僕も都合がよくなり次第埋め合せをつけるつもりであつたから。』

この話がある間、お綱さんは用にかこつけてか、裏の方ばかりにゐて、出ては來なかつた。

お鳥も、一つには、義雄の出て行つた留守を獨りでここにはゐづらくなつたのだらう、直ぐ出る汽車のあるのを幸ひ、――あす、でなくば、あさつて歸る約束で、――兄の方へ立つた。札幌區立病院に這入ることは、かの女がけさ行つて既に獨斷で決めて來た。そして、そこの三等室なら、森本春雄も這入つてゐて、義雄はよく知つてゐるので、贊成した。

義雄はその病院の前にある下宿屋の、四疊半に爐を切つてある部屋を約束した。そこへ荷物――と云つても、づツくの革鞄だけだ――を運んでから、前の病院へ春雄を見舞つて見た。

『意外に經過の長いには困つたよ。』春雄はまだ寢臺の上に寢てゐて、話をする。然し鼻を中心にした顏中の繃帶は取れてゐた。『かう長くなるなら、今年の精算をしてから這入るのであつた。鰊の方が十五萬圓、鮭鱒（けいそん）の方が五萬圓、それがどうしても四五萬の利益はあがつてをる筈だが、どうも、まだ精密な勘定が出來ない。』

『然し、もう、よささうでないか？』

『もう、直き退院が出來るが、大將は遊んでばかりをつて、僕にまかせ切りで困る。今、釧路へ行つてるが、あすぐらゐここへ來る筈だ、――會ひ給へ。』

『會はう』と、義雄が答へたが、丁度その松田が來るのを幸ひ、森本から云はせて少し金を借りるつもりである。實は、お鳥が來て、かう〳〵いふ次第だとうち明け、遠藤から借りただけでは心細いし、そのうちには何とか道がつくからと云ふ。

『兎に角、話して見よう。――然し、君のにも會へる、ね』と、春雄は笑つて云つた。

然し義雄はそれには餘り立ち入らず、旅行中に見た槲の皮剝ぎ並びに澁取りの新事業や、アルコール製造場のことや、牧場や未墾地の遊んでゐるのが多いことや、火山灰の利用方法などを話すと、年若い春雄の心は踊つて、

『早く獨立して、僕も何かやりたい』と云ふ。渠はおほきな漁場の帳場をあづかつてゐるだけに、僅かの給料で束縛されてゐるのが面白くないといふ心持ちがそのたださへ血の氣の少い病顏にも見えた。

そして、その無聊の感に湧き立つ若い血が、春雄の繃帶の取れた跡の靑い顏にほとばしつたのを見て、義雄も亦、自分の深い胸の奥に於いては、溜らないほどの競爭心をふり起した。

## 一五

札幌區立病院は、――義雄が有馬の家から散歩がてら出ると直ぐ横手に當るので、這入つて時々瞑想に耽つたことがある農科大學附屬博物館の、はびこつた牧草や、背の高いアカダモや、ドロや、柳やの多い、その廣い構内の東南端に接して、――北一條七丁目の一廓の、廣く長く、まばらな鐵柵をめぐらした中に立つてゐる。白塗りの大きな西洋造りである。

この嚴格な建て物の正門に向つた粗末な一下宿屋に、義雄は陣取りをきめたのである。渠の好きな錢湯も、その隣りに床屋つきで、直ぐそばにある。而も、それは渠が樺太から有馬の家に着して、初めて、久し振りに、東京に於けると同じ樣なくつろぎを以つてそのからだを洗つたところである。旅で隨分延びた髪を五分刈りに刈らせ、入浴して來てから、義雄は夕飯に初めて自分の下宿屋の食を喰つた。

『お鳥はまだ汽車の上だらう』と考へて、自分の獨りが寂しくなる。火がつくと、直ぐまた宿を飛び出し、その北一條通りを右へ一丁ばかり、巖本天聲の家を過ぎ、左りへ曲つて、道廳構内の白楊樹下を、今は、もう新らしい感じを起さないと考へながら通り抜け、それから北四條一丁目の氷峰の社へ行つて見た。渠は今、岩見澤から歸つたところで、編輯室に於いて、和服できんたま火鉢をしてあたつてゐる。

『さう寒いのか、ね？』義雄が不思議さうに聽くと、

『なアに』と、氷峰はにこつきながら、髪を分けてもないのが芥子坊主の樣に見えるあたまをくるりと一つまわして、ぬッと義雄の方へ顏を向け、『北海道人はこれがただ習慣の樣になつてをるのぢや。』かう云つて、まだその腰を動かさない。

『どうだ』と、義雄はそのそばにあぐらをかき、『山林拂ひ下げはうまく行きさうか？』

『土曜日であつたから、後れて駄目よ――空知支廳長の宅へも行つたが、來客が多い

ので、ゆツくり話も出來なかつた。』

『支廳長は忙しいものだ』と、そばにゐた一社員が云ふ。

『なアに、あいつらは新聞雜誌記者にはあたまがあがらない、さ――わざと安く拂ひ下げなどして、自分等がその間で口錢取りの樣なことをやるのぢや。少しおどしつけて、えい土地を取つてやらうと思ふが、あの勢ひでは駄目ぢや。松本雄次郎も行つてをつたし、遠藤長之助も渡りをつけてをるらしいし、その他にも道會議員を初め、山師連が押しかけてゐるらしい。ほんの、形式ばかりの公布など出た時は、もう、遲い。あいつ等は丸で乞食も同樣ぢや。祝ひごとがあると、さア、この時ぢやとぬかさんばかりに、われ勝ちで集つて行くのぢや。』

『それくらゐに運動しなければ、北海道の樣な新開地では、生存競爭が烈しいから』と、また別な社員が云ふ。

『獨り北海道ばかりぢやアない。』義雄はそれに附け加へて、『人生はすべて新開地だ。』

『直ぐまたお說法か？』氷峰は火鉢を下り、坐わつて、卷煙草に火をつけながら、『時に、いつ歸つた』と云ふことから、自分の知つてゐる人々や場所などの新聞を義雄から聽き取り、『雜誌の評判はどうか、な？』

『惡いことはないが、兎に角、あやぶまれてゐる、ねえ。日高でも、帶廣でも、十分肩を持つて置いたが――第二號も出來た、ね。』

『出來たのは出來たが、金の寄らないので困る。』氷峰は顏をまたくるりとまはして、眞面目になり、『然し勢力が出て來たには相違ない。うちの雜誌の影響に違ひない、週刊や旬刊の雜誌體の新聞は、北星でも、北海新聞でも、みなつぶれてしまつたから――』

『ぢやア、北星の呑牛君はどうしてゐる？』

『あれは表面は休刊ぢやが、呑牛は道會の議長つき書記に早變りして、羽織袴でこつ〳〵かよつてるよ。――それに、北海新聞の廢刊が面白いではないか？　あの雪影がやつて來て、廢刊の辭をみなに書いて呉れと云ふから、呑牛と僕とで「廢刊を祝す」

と書いてやつた。それをそツくり載せる奴ぢやから、人に馬鹿者にされるの、さ。』

『寛大なのだらう。』

『なアに、あいつは嬶アを女郎に賣り飛ばして、お多福の樣なハイカラ記者にくツついてをつたらえいのぢや。』

『可哀さうに！』

『會ふて見れば背が高い上に、ちよツと立派な風采をしてをるから、人が胡魔化され易いが、北星で嬶ア事件を素ツ破抜いたら、呑牛のところへ談判に來て、呑牛の前で泣き出したさうぢや。』

社員どもはそれを聽いて笑つた。義雄も、自分の歡迎會が西の宮支店であつた時、菅野雪影なる人物に會つて知つてゐるから、雪影があのツぽなからだでと思ふと、ふき出さざるを得なかつた。

『君の歡迎會の時も』と、氷峰はなほ調子に乘り、『あの社だけは入れないといふ動議もあつたのぢやが、人數が少いと困るから入れて置いたら、席順が低いといふて、おこつて歸つたのぢや。』

こんな無駄話を氷峰がやつてゐると、休刊北星の主筆高見呑牛が氷峯の言葉通り羽織、袴でやつて來た。

『今頃、どうしたのぢや』と、氷峰が聽く。

『この頃、道會が内輪に妙な喧嘩があるので』と、呑牛はランプがまぼしい樣に目をぱちくりさせながら、『うるさくツて困る。相談や、寄り合や、仲裁でけふも今までかれこれしてをつた。』

『何ぢや？』

『なに、はんか臭いこと、さ——僕が今でも新聞を持つてをつたら、いい種だが、なア。』

『君ア早變りしたと、ねえ』と、義雄は口を出す。

『おお、まア、かういふありさま、さ。』呑牛は兩手を擴げて、自分を見まわす。そして、『遠藤はどうであつた、ね？』

『感心に奮發してゐたよ、宿屋などでもなか〳〵持ててゐた。』

『あれは、兎に角、今度の地盤を固めて置く必要があるから、どこへ行つても、ぬかりのない人物だ。』

『おれも一つ』と、氷峰は煙草の灰を拂ひながら、『あれを贊助員にでもして、少し金を出させたいのぢやが――』

『今、ないらしいよ――數日前に、勸銀から三千ばかり貸りたさうだ。』

『いや、それで思ひ出すが』と、義雄は云つた。『その金で多分馬を買つたのだらう。新冠（にいかつぷ）の御料牧場で、丁度、その金目ぐらゐの拂ひ下げ馬七八匹を約束してゐたらしかつたから。』

『あれほど、また、馬の好きな奴も少いから、なア』と、呑牛は相變らず目をぱちくりさせてゐる。

『馬の話でも』と、義雄は氷峰に、『先づ記事の材料取りに行つてやり給へ。』

『それも考へてをるが、もう、ないか知らん。』

『誰れも現金をさう長く持つてゐない、さ』と、呑牛、『松本雄次郎だツて、持つてをる時行くと、きツと出す奴だが、ねえ、ないと來たら、あれほどまた貧乏な議員もない。』

『それはさうと』と、義雄は呑牛に向ひ、『畑中新藏といふ人を知つてるか、ね？』

『ありやア名うてのおほ山師だ』と、呑牛は直ぐ答へた。『あいつは全體何をしてをるのか、誰れも知らん。』

『實は、遠藤の紹介でけふ會ひに行つたのだ。』

『そりやア、あいつより見れば、遠藤はずツと眞面目だ。』

『僕もさう見て取つたが、多少山師でなければ乘つて來ない話で』と、義雄は渠に相談した事件を說明する。

『君も』と、氷峰が義雄に、『そんな山を計劃する樣になつただけ、話せる、なア。』

『然しあいつは』と、呑牛、『あぶないぜ——今、訴へられてをるから、なア、詐欺取財で。』

『そりやア困る、ねえ』と、義雄は云つて、明き屋買ひ占め事業も亦駄目かと失望する。

呑牛は新藏のこれ（と鼻を指さきではたいて）が殆ど本職の樣で、自分もそれにかけては負け勝ちだから、五錢白銅をころがし、おもてか裏かの當て合ひで、こないだ、小拾圓も卷きあげてやつたことを白狀した。そして、あいつ等はまだ知らないが、白銅は字のある方が重いので、それさへ知つてゐれば、誰れでもやつて見給へ、十回に九回までは裏が當るものだといふことを說明した。

『さうか、なア』と、氷峰はひまにまかせて白銅を出して試めして見る。それをころ〳〵ッと投げ出すと、それが右か左りの方へころげて行つて、ぱッたり倒れて裏が出る。また、ころがすと裏が出る。すると、義雄や社員も亦面白がつて、われがちにそれを眞似した。

## 一六

義雄は、學校時代を、東京では父の家からかよつたし、仙臺では多く自炊して送つたので、下宿屋生活を却つてこの四十近くになつて初めて經驗するのである。

ゆふべ一と晩は、兎に角、書生に返つた樣な氣がしてしほらしく過した。けふは晝頃に目を覺まし、それから遠藤の『日高膽振觀』を書き出したが、筆を運ぶ間に、一つには、雨降りで、何となく寒い爲めでもあらう、氣がゆるむと同時に、由仁へ行つたお鳥のことが思ひ出されて、なか〳〵段落が進まない。

病院に入れるは入れるとしても、あの一年ばかりも漫性になつた病氣がさう早くきまりのつくものではない。或は全く永久の漫性になつたのかも知れない。さう云ふ不具な女と一緒になつてゐたところで、義雄自身の機能はさういつまでも空しく滿足してゐることは出來ない。

寧ろ會はないうちは、渠は、旅行中で、再び自分の胸に飛び込んで來ようとするのを早く見たくて、見たくて溜らなかつたが、いよ〳〵再會して見ると、ただ厄介物に取りつかれた樣な氣にもなる。

然し數週間入院するだけの分は與へてあるのだから、今、かの女が兄のところへ行つて留守なのを幸ひ、逃げてしまはうかとも考へられる。

今度逃げ隱れをすれば二回目だ。第一回のは加集のところで自分が見附かつた。そして、そこをもふり切つて出たのが、かの女と加集と關係する初めであつた。今度ふり切れば、關係者は誰れだらう？

勇にはその勇氣があるまいし、氷峰も亦そこまで行つてはゐないし。つまり、かの女がまだそんなことに進むまでの親しみを持つてゐるものは、札幌にはゐない。きツと、止むを得ず、兄のもとへ歸るにきまつてゐる。

『兄に歸れ、兄に歸れ』と、もう、さう決心したかの如く心で叫ぶと、おも荷をおろした様に身が輕くなつた氣がする代り、自分と女なる物との間に、非常に大きな罅隙が出來た。

その罅隙は、義雄自身には、暗い死の影におほはれてゐる三途の川の様だ。深さも知れない底の底で、闇から闇へ通り過ぎる記憶といふ水が、がう〳〵と流れてゐる。その音を越えた向ふ岸には、美しい女が熱もなく光りもなく立つてゐるが、そこへ渡る掛け橋が絶えてゐる。

然しそれは不思議でないと思ふ。橋とは自分の熱心であつたのだ。自分には今熱心といふ物がない。お鳥に對しては勿論、敷島に對してもさうだ。義雄は敷島に約束通り繪ハガキを一度送つた切りだし、かの女も亦義雄の留守に手紙を一度よこしてあつた切りだ。

義雄は敷島の手紙を、お鳥に見られない爲め、きのふの朝、厠へ這入つて讀んだが、それは渠を引きつけるだけの力がなかつた。ゆふべも、行きたいのをやめたのは、必らずしも遠藤から借りた金をそツくりお鳥に手渡ししたからばかりではない。女は旅行するといふのを半ば信じてゐないのだ、最後に別れた日の翌々日出した手紙の文句も冷淡で、ただ申しわけに、

『もう、旅からお歸りで御座いますか、ちと遊びに來て下さい、待つて居ります』と云ふのであつた。

『ああ、女はいやだ』と云ふ様な氣で、然しまた思ひ出したりしながら、膽振日高觀の原稿を書きあげたのは午後六時であつた。遠藤の招待時間に一時間後れたわけだ。

西の宮支店と云ふのは、義雄の歡迎會があつた中島遊園の料理屋で、その札幌の市中のはづれへ、南十數丁の道を、渠はしよぼ〳〵雨を冒して、徒歩で行つた。日高や十勝を馬上で巡回して來た渠は、今や、その馬も同様なみじめだ。

見おぼえのある女中も二三名はゐるが、名も知らない十名ばかりの小學教員どもは、もう醉ふだけ醉ひ、喰ふだけ喰つたらしい形勢で、主人役の遠藤を捕へて、鹿爪らしく返禮の盃を献ずるものもあれば、意表外に道化て一座を笑はせるものもある。

『まことに結構な御馳走にあづかりまして、わたくし共は滿足に存じます』と、痩ぎすな、立派な頰ひげ、あご鬚の、年長らしいのが云ふそばから、

『なアに、君、さう眞面目腐らんでも、遠藤さんは粹なお方だよ』と、太つた禿げあたまの男がまぜかへし、『ねいさん、まア、さうぢや御座いませんか？』そばにゐる藝者に向つて、變梃な手つきをして見せ、愛嬌に酒をついで貰ふ。

義雄は、遠藤によつて一座の人々に紹介されてから、渠に『道會議員遠藤長之助氏の』と割註した『膽振日高觀』を渡し、猪口を手にし出す。すると、鹿爪らしいのが先づ挨拶にやつて來て、

『われ〳〵は北見の田舍者ですから、かういふところへまゐりますと、多少面喰らふ



方で』など云ふ。

『まア、君』と、また禿げあたまがやつて來て、『どうせ、廣告はせんでも、田舍者には決つてをるのぢや。どうか、田舍者でも惡からず――さア、うは髯の先生、五分刈りの旦那、一杯どうです』と、義雄に猪口をさす。

義雄は、教師の經驗を持つてゐるが、不斷に先生と呼ばれるのが大嫌ひの性分だ。その上に、『うは髯の先生』とか、『五分刈りの旦那』と來ては、なほ更ら苦笑せざるを得ない。然し醉ひがまはつてゐるのだと思へば、遠藤の態度と同じくそれを許して、心よくその猪口を受けた。

教員どもが皆歸つてから、巖本天聲がやつて來た。他にも招待があつたとかで、珍らしく醉つてゐる勢ひで、遠藤が若い藝者どもをからかふのにつれて、鞠子といふ一人を捕へ、

『鞠ちやんばかりは僕の理想の藝者です』と、遠藤や義雄に改まつて紹介する。義雄

は天聲がまたへまなことを云ふ、わい、と思つたら、果してほかの藝者どもが互ひに顔を見合はせて、冷笑の様子を見せた。

天聲は幅を利かせれば利かせることが出來る北海メールの主筆でありながら、さう野心のない男なのだらう。遠藤の様な多少知られてゐる、而もメールを利用しようといふ考へが十分にある人を、これまで直接に知らなかつた。義雄の旅行事件からして、天聲は、今夜、初めて遠藤に會つたのである。

義雄は、天聲に、遠藤の調査の結果は書きあげて今渡して置いたが、新聞紙上には、筆者の名は出さず、また出されたくもないので、メール社の訪問記事とした方がよからうなど云ふ注意を與へ、別別に車に乘つて歸路についた。

雨がどしや降りになつた夜だ。

『この毎日の様に降る雨が、直ぐ、もう、雪に代るのです』と、遠藤が云つたのを思ひ出して、義雄は自分なる物が段々冷淡になつて來たのをおぼえると同時に、北海道の天地も段々冷えて行くのをいよ〳〵切實に感じて來た。

今夜の禿げあたま教員の態度も面白くない。天聲の野暮な言葉も面白くない。自分の止むを得ず生眞面目であつたのも面白くない。さりとて、また、これから下宿屋に歸つて——多分、お鳥はまだ來てゐまい——獨りで寢るのも面白くない。然し、『一つ、最後と思つて、敷島を見舞はう』と思ひつくと、車が薄野（すすきの）の仲通りへ來た時は、どうしても、それを中央の四角から一つさきの角を左りへまがらせずにはゐられなかつた。

井桁樓を思ひ出の多い柳の裏門からあがると、番頭は義雄をおもて二階の廣間へつれて行つた。

『また、まわし部屋に寢かされるのだ、な』と豫想すれば、いツそ歸つてしまはうかとも思はれる。

實は格子さきに立つて、金がないからと、かの女を試して見ようかとも思つた。然し、それは、いつか、かの女に云つて聽かせられた手であるから、かの女の方が却つてよく承知してゐることで、卽座に

『その手は喰はぬ』と云はれては馬鹿を見るばかりだと、思ひとまつたのである。

『……』

ぱたり〳〵と、けだるさうな草履の音をさせて廣間のそとへ來て、するりと唐紙を細目にあけ、敷島は中をのぞいた。そして、義雄がインバネスを頭からかぶり寒さうにしてゐる顏を正面に見たので、

『おや、あなたであつたの。』つかつか這入つて來て、例の大きな長食卓を挿んで、相對する所に坐わり、微笑しながら、『いらツしやいまし。』丁寧なお辭儀をする。そして女が顏をあげて、じツとこちらを見てゐるところで義雄はただ無言で、にこ〳〵しながら考へた——今夜切りで、この後は來られるか、どうか分らない。が、女がこれまで



に見せた通り、實際に自分を思つてゐるか、どうか、最後の試しをしてやらうと。

『とまつて行くの、これから』と、女が云ふのをしほに、

『さア、どうしようかと考へてるのだ。』

『折角、來たのに』と、かほ色がかはる。その變つた顏を見つめながら、

『相變らず、お前の左りの耳の下には引ツつりだこがある、ね。』

『大きにお世話です——これは梅毒からではない、ニキビのかたまりだと云つてあるのに！　あなた、本當に歸るの？』

『うん』と、煮え切らない返事をして、暫らくまた無言で、女と顏を見合はせてゐたが、

『實は、金がないのだ。』

『うそ、うそ。十分飲んでゐる癖に』と笑ひながら、『ぢやア、またまわし部屋だと思つて、よそへ行く氣だらう？——今夜のお客さんは早く歸ると云ふてたから、あとで明きます、わ。』

『おれは、もう、まわされても、何でもそんなことには構はない、さ。』

『それだけ、あなたの心が冷えたのでしよう？』

『なアに』と、云ひ當てられたのを胡魔化すつもりで、『氣候が寒くなれば、それだけ、普通の人間なら、冷える。』

『へい、不思議です、ね。』

『……』こちらはまた言葉のつぎ端を失ふ。

『本當にないの？』

『ないから、ないと云ふの、さ』と、眞面目腐つて答へる。

『では、わたしに何とか工面せいと云ふの？』

『まア、さうでもして貰はなければ、歸るより仕かたがない。』かう云つて、女の心を兇るのはここだとばかり、女の細い目の中を見つめる。

『この不景氣に、女郎が金など持つてるものか、ね？』

『現金はないとしても、さ』と、女の所謂不景氣は實際で、東京の去年あたりからの不景氣が、北海道では、やツとこの頃その絶頂に達してゐるのを思ひ合はせたが、

『お前が責任を負へば、何でもないぢやアないか？』

『責任を負ふと云へば、わたしの衣物を質屋へでも持つて行かせるより仕やうがない——それにしても、もう、遲いから駄目ですもの。』

『行かして見ればいい、さ。』

『もう、十一時を過ぎました。質屋は十一時までしか明いてをりません。』

『ぢやア、今夜に限らない、とまつてゐるのだから、夜が明けてからでいい。』

『そんなことが出來ますか、わたしとして？　何ぼ好きな男の爲めとしても、朋輩から笑はれます。』

『笑はれたツていいぢやアないか！』

『あなたはいいか知れませんが、わたしの稼業の爲めにはなりません。』
『だから、歸る、さ』と、强く叫ぶ。
『本當にないの？　うそでしよう？』
『うそなら、見るがいい、さ』と、お鳥が編んで呉れた毛糸の巾着を出す。
『敷島さん、お膳はどうします？』番頭がかげから催促してゐる。
『まア、ちよツと待つて下さい。』女は大きな聲を出したが、義雄のそばへまわつて來た。そして、
『うそでしよう』と云ひながら、財布をあらためたが、五錢白銅と十錢銀貨としかないので、失望の樣子だ。その樣子をこちらは見て取り、この商買女めと思つたから、
『さア、歸る』と、立ちあがる。
『どうしても、歸るの？』女も立ちあがる。
二人は立ち向つて、互ひに無言で目と目とを讀み合つた。渠は女の目にもツとうるみが出さうなものだと考へた。
『どうせ、生き別れだ。』女は曾てこちらの云つた言葉を思ひ出してか、斯う繰り返す。
『さきへ冷えたものがさきへ死ぬんだ。』かう、こちらもまたいつか云つたことを再び云つた。
『ぢやア、もう、來ないと云ふの？』
『緣――と云つても、金だらう――があつたら、また來らア。』
『では、また通り一遍のお客として、ね？』
『その方がお前を苦しめないでよからう。』
『あなたの爲めに隨分苦勞したのに――』
『うまく云つてらア、この馬鹿！』
『また！――馬鹿はおよしなさいよ。』
『馬鹿だから、馬鹿だ。』

『どうせ、女郎などしてゐるものは馬鹿、さ。』

女も名殘り惜しいと見え、男の言葉をかう云ふ風にあしらつてゐたが、例の見えか癖かを出して兩手をちよツと兩眼に當てた。そして思ひ切つたやうに、

『仕やうがないから、番頭さんに相談して見ます』と行きかける。

『おい、ちよツと待て！』こちらは女の心が分つたかの樣にして女を呼びとめ、『實は、持つてゐるよ』と、また火鉢のそばへ坐はり込む。

『それ、御覽なさい！』女もそのそばへ來て、『人を馬鹿にしてる、ねえ——見せて御覽。』

『そりや。』義雄はチョツキの隱しから五圓札を出した。これは、渠の留守中にお鳥が來たら小使ひにも困るだらうと思つて、旅行さきから天聲に賴んで置いた物だが、それがぐづ〳〵後れて、やツと今夜渠に會つた時に受け取れたのだ。『實は』と、女の肩に手をかけて、『お前がどれだけおれを思つてゐるか、試して見たの、さ。』

『そして、その結果は？』

『その結果は、矢ツ張り、お前が女郎で、おれが通り一遍のお客、さ。』

『あきれてしまう、ねえ、この人は！』女は斜めにそり返つて、男を瞰む樣に見ながら、『わたし、あなたを見そこなつてゐた。』

『おれもお前を見そこなつてゐたのだ。』かう云つて、インバネスをあたまから肩におろす。

『あなたはお客？』

『お前は女郎、さ。』

『では、もと〳〵ぢやありませんか？』と笑ふ。

『さう、さ、もと〳〵だ。』こちらもおつき合ひに笑ふ。

『苦勞しただけ損であつた。』

『然し損の仕直しは、もう、仕ない方がよからう——？』

『兎に角、あなたがさきへ冷えたのだから、あなたのお言葉に據れば、あなたがさきへ死んだの、ね。』

『おれには、お前がさきへ死んだのだ。』

『うそです、わ。』

『なアに、うそはお前の本職、さ。』

『この通り』と、腕をまくつて見せ、『血がかよふてをるのに？』

『さう、さ、おれに對する愛情のない血は、おれには死人の水だ。』

『情があつても、あなたが受けなければ仕やうがない、さ。』

『受けられる樣に仕ないぢやアないか？』

『どうせ、女郎ですから、ね。』

『そして、おれはお客だから。』

番頭がまた催促に來たのをしほに、二人は立つて、まはし部屋の方へ行き、そこで酒を酌みかはした。

義雄は初めから醉つてゐたが、敷島はいくら飲んでも醉はないと云つて、自分が正宗の二合瓶を二三本どこからか工面して來て、おほきなコップでぐい〳〵あふつた。

女はそれでもまだ醉はない、醉はないと負け惜しみを云ひながら、ぐでん〳〵になつて褥に這入つた。

*　*　*

『敷島さん、お客さんが歸ると。』かう、朋輩から呼び起され、女は、

『さア、しまつた』と云つて、飛び起きて行つた。

もう、午前九時近くだ。ゆふべの天氣とは打つてかはつて、立派な日が部屋部屋を照らしてゐる。女が持つて來た新らしい楊枝としやぼんと手拭ひと――これには香水をつけてあつた――を持つて、獨りで、下廊下のいつもの洗面場に行く。廊下を内庭

から仕切るがらす戸を通して、庭の池の金魚や緋鯉を見ながら、楊枝をつかふのもけふ限りだらうと思ふ。

洗面場から玄關にとほつた廊下には、がらす戸に添ふて、新らしく大根を――これが多くの女郎どもの食ひ物になるのだらう――重し漬けにした大樽がいくつも並んでゐる。それに日がよく當つて、糠臭い氣を發してゐるが、日の光りは東京に於ける冬の日の様に弱々しいので、急にからだに冷氣が增すをおぼえて、義雄は東京の歲の暮が來た様に心細くなり、同時にまた氣が急にいら〳〵して來た。

『かう浮か〳〵してはゐられない。』渠は顏を拭きながら、手拭ひについた香水のにほひを嗅いだ時にかう考へた。

敷島は男を自分の本部屋へ改めて通した。蒲團を方づけ、障子を明け放つてよく風を入れ、火鉢の火と鐵瓶の湯とを持つて來てあつた。そしてさし向ひになると、女は、

『もう、これッ切り來ないつもり、ね』と、少し考へ込んだやうに云ふ。

『……』義雄は曾てここでだだを捏ねた時、仰向けに寢そべつて兩足をかけたことがあるのを思ひ出される黑塗りの簞笥が、相變らずよくてか〳〵と光つてることを考へてゐた。

『あなたのやうに正直な人に會つたことがない。』女はなほ男を見つめてゐた。

『さうか、ね』と、こちらも向ふを見つめて寂しい微笑をする。思ひ起すと、二人が床に這入つてから、洗ひ浚ひ云つてしまつたのである。東京から妾が來て、けふ、あすのうちに入院する。その妾は置き去りにするかも分らない。然し樺太の事業が全く失敗だから、どうしても一と先づ東京へ引きあげるよりほかに道がない。都合によると、北海道にとどまることが出來るかも知れないが、それにしても、妾と手を切るのは勿論、お前を受け出してやると云つた約束も、この場合、取り消しだ、と。

『さう、はッきりと、おなかを立ち割つた様に云ふて呉れる人もないものだ――その心をわたし――』

『へい』と、渠は皆まで云はせずに茶化した顏つきを見せたが、あの時、かの女に對する一種の熱い同情が自分の目か顏かに現はれようとするのを隱したのであつた。

『……』女も暫らく無言でゐるので、

『もう』と、渠の方から愛想を云ふのだが、聲が二つに割れて而もおも〳〵しい、『あの角の湯屋へも一緒に行くことが出來ない、ね。』

『さうでしようか？』女が素直に、まだ未練が殘つてるらしい樣子に見えるに附けても、思ひ出はそれからそれへと渡つて、こちらの胸には一杯に溢れて來るものがある。

然し、過ぎ去つた夏や秋の如く、もう、取り返しが出來ない。再び女の心のあんなあツたかみに接する時は金輪際なからう。たとへ、自分なる物を見そこなつて、徒らに愉快な、もしくは徒らに快濶な、つまり樂天的な男とし、女の絕えない苦勞を忘れようとするばかりに、一時惚れ込まれたのであつたにせよ、こちらの自己のうちに一時でも强く複雜な孤獨生活を高調させて吳れたのはありがたかつた。

然しそんなことを云つて、別れの辭にしたとて、かの女に分らう筈がないと思へば、ただ自分が自分でこの感じを味はふよりほかはない。お鳥に對しても、亦、さうだ。自分が愛した女が自分の愛に十分に信じられなくなつた以上は、早くそれと自分の所謂『死に別れ』をして、自己その物の中に出來た分泌物——愛がなくなつた女は分泌物だ——を排除しよう。それが自己の强烈生活を保つ所以である、と。

女は無言で入れた茶をこちらも無言で飲んだ。

『さア、歸る』と、義雄は俄かに立ちあがる。

『もう、歸るの』と、敷島も亦電氣に觸れた樣につツ立つ。

二人は手を固く握り合つた。

『緣があつたら、また寄つて頂戴。』

『然しお前は、もう、死んだのだ。』

『その代り、生れ變つてをるか知れません。』

『……』何と云ふ頓智だらう？　女のさう云ふ悧發な點はなか〳〵こちらも思ひ切れなかつたのだが、ここでは、もう、あと戻りする場合ではなかつた。一層思ひ切つて、『その時ア、また、おれがお前を認めることが出來まいよ。』

それッ切り、二人は共に二階をおり、裏玄關へ來た。

義雄は下を向いて靴の紐を結んでゐながら、自分の後ろまでふところ手をして送つて來た女の耳たぶの下に在るニキビのかたまりが、いつも自分が氣にしていぢくつて見ると、やわらかであつたことを考へてゐた。

## 一七

森本春雄は、まだ病院を退ける場合でないが、東京にゐる父が卒中で死んだといふ電報を受け取つたので、急に退院の手つづきを濟せ上京することになつた。

それを知らせがてら、渠は義雄の下宿を音づれた。そして、

『うちの大將にも困つてしまう。人が父を失つて心配してゐるにも拘らず、自分は勝手に飲みつぶれてゐて、一向、ことを運ばして呉れないのだ。』

『どこにゐるのだ？』

『幾代（いくよ）で流連してゐるらしい。そして、釧路までもつれて行つた妾は、別に、宿屋へ置いてあるらしい。無駄なことにはぱッぱと金を使ひながら、僕の大事件を少しも思つて呉れない。實に困るよ。』

『いつ立つ、ね？』

『實は、けふにも立ちたいが、賴んだ金があすの朝でなければ出來ない。それに、大將が、あす、或事業の相談で登別溫泉まで行くので、そこまでまわつて吳れと云ふし。室蘭線へまわつて、そんなことをしてゐれば、青森を出るのが、どうしても、あさつての晩になる。』

『そりやア、困るだらうが、主人のことだから、仕やうがなからう。』

『今夜も、飲みがてらやつて來いと云つて來たが、僕はいやだ——父が死んだと云ふのに、酒など飲んでゐられるかい？』

『それもさうだ』と答へて、義雄は春雄のわさ〳〵した樣子が少し落ちつくのを見計らひ、自分も歸京したいこと。女は置いて行くが、自分の歸京費さへないこと。春雄に工面を賴みたいのだが、さう云ふ場合だから、どうしても、松田に話して吳れろといふこと。などを語つた。

その翌日、春雄は松田に幾代へ呼ばれ、そこから一緒に停車場へ行つた。

午後二時の列車だから、義雄は見送りに行くと、春雄は止むを得ず飲ませられたと云つて、大分顏が赤くなつてゐる。そして、

『かういふ次第で、君の賴みを話す樣な眞面目な時がなかつたから、汽車に乘つてから話すよ。』

『ぢやア、ぬかりなく賴む——僕も小樽の宅の方へ手紙をやつて置くから。』

そこへ、松田が熟しの樣な顏をして、よろ〳〵とやつて來て、

『やア、失敬』と、天鵞絨ベンチの上へどツかり腰をおろす。八月十五日に樺太から一緒に小樽に着し、また一緒に汽車に乘り、この停車場前で別れた切り、二人はけふが久しぶりだ。

『暫らくでした』と、義雄もそのそばへ腰をかける。『釧路からまた登別ですと、ね。』

『まア、溫泉へでも這入つて來る、さ——時に、あの鑵詰事業の協同問題は失敬した、

な。』

『なに、どう致しまして』と、義雄は輕く答へたが、この人さへ事情を酌んで、その樺太漁場につぎ込んでゐる資本の百分の一でも千分の一でも出してくれたら、何のことはなかつたのにと思ふ。そして、氣を轉じて、『いつ小樽へお歸りです？』

『二三日で。そしたら、少しやつて來給へ。』

『いづれ伺ひます――僕も、もう、歸京したくなつてるのですから。』

『然し、君』と云つて、松田は小指を出し、『これが來たて、ね。』酒臭い息を吐く。

『は、は、は』と、義雄は受け流した。然し手紙を出す都合もあると思つたから、お鳥が入院の件を直接に話した。

松田の妾らしいのが、同じ二等待合室の向ふの方に獨りで腰かけてゐるのを見たので、義雄は見送りをわざと改札口で失敬する。

松田がプラトフォームをよろめきながら橋ののぼり口の方へ進むあとについて、女はまたちよこ〳〵歩いて行く。かの女は今一度義雄の顏を見て置かうと思つてか、ちよツとふり返つた。

その時まで、春雄は柵を隔てて、義雄と別れを惜しんでゐた。然しそれも、

『ぢやア、失敬』と云つて、離れて行つた。

義雄は、それを見送りながら、春雄と云ひ、敷島と云ひ、自分の範圍が段々狹まる樣な心細さをおぼえた。そして松田と關聯して藝者お仙のことを思ひ出された。自分等と同船で樺太を逃げて來たり、自分等と小樽のはと場で別れてから、あの女放浪者はどこへ行つたらう？　あの時、義雄自身も亦一種の放浪者にならうとは思はなかつたのである。ところが、今やこの自分の姿は放浪をとほり越して斷橋の行き惱みになつてゐる！

――了――

# 附

# 錄

# お鳥の苦み

清水お鳥は子供の時から、父が移住してゐたので、北海道に於いて育つたし、また父の存生中、東京との間を二三度往復した經驗もあるので、人に心配されてたほどの困難も感ぜず、海岸線で無事に札幌へ着した。

その着した日は夜に入つたので、先づ停車場附近に宿を取り、それから、知らない道を夜だから、車をやとつて、有馬の家を訪問した。かの女の考へでは、義雄との消息が暫らく絶えてゐたし、且また上野から打つた電報に從ひ、青森まで迎へに來ることもなかつたから、渠が實際にそこにゐるか、どうだか、不審であつたのである。

『もしまた義雄がゐるにしても、自分を心よく迎へて呉れるか、どうか？』かう思ふと、何だか全く他人を問ふ爲め他人の家へ行く樣な氣がする。一たびは自分にばかり



熱心であつた人が、その熱心をひよツとするとほかの女に向けてゐるか分らない。それが東京にゐる時からの想像であつたが、今やその想像の當つてゐたか、ゐなかつたかが分るのだと考へると、當つてゐる方が本當らしくなり、胸一杯のねたましさが先きに立つ。

その癖、自分は必ずしも渠に全心を向けてゐるのではない。渠にうつされた病氣——それがまだ直らない——を直して呉れさへすれば、男ならやうやく徵兵に取られる年頃だもの、どこへでもお嫁に行くことが出來る。現在、自分が承知しさへすれば、あの寫眞學校の先生も氣があるし、男生徒のうちにも、直ぐ貰つて呉れるものがある。

この病氣——これが、いつにても、與へたい承諾の邪魔物だ！　自分の戀しい人もある。自分が貰つて貰ひたい男もある。然しこの病氣を隱してゐたい爲めばかりに自分から近づいても、却つて向ふから恨みを云はれる。

誰れがいつまでも女房、子供のある者にくツついてゐよう？　誰れが貧乏文士など

にいつまでもへばりついてゐよう？　誰れがいつまでもあんな穢らしい二階借りをして默つてゐよう？　せめていい男の若いのならまだしも、四十づらをさげたあの貧乏おやぢめ！　人を傷物にしやアがつた！

『畜生！　病氣を早く直せ！』から云ふ風に激して來ては、かの女は車の上で慣れない夜街を進みながら、自分で自分の肉づきのいいからだをいだいて、性　の忿懣に堪へられない。いくら走つてゐる車でも、なほ走りが遲い樣な氣がする。それと同時に、またいつものところが痛み出すのをおぼえて來る。

『畜生！　畜生！』心で義雄を罵りながら、着てゐるセルの衣物に夏帶を――一つには、もう、北海道の時候に後れて見ツともないといふ氣から――解きほどいて――うツちやりたくなる。

と云ふのは、セルも帶も義雄が買つて呉れたもので、而もそれらはお鳥を棄てて一度渠が逃げたその申し譯に、心で逃げると先づきめてゐた時、渠がわざ〳〵お鳥を白木屋へ連れて行つて、好みのままに買はせたのだとは、再びもとの仲になつてからの渠の白狀である。

めづらしく衣物、帶、並びにその附屬品を揃へて買つて貰つた時は嬉しかつたが、それが無言での別れの申し譯であつたのだから、今、着てゐたところで、決して渠の恩を着せられるわけではないと思ふが、衣物などは脱げば脱げる。然し渠に着せられた病氣は、重くなつたり、輕くなつたりするばかりで、決して直らない。

『もう、一生直らないのかも知れない』と考へると、おのればかり直つたのをいい氣になつて、人のを冷淡にうツちやつて置く義雄を見附け次第、飛びかかつて引ツぱたいてやりたい。

お鳥の忿懣は、張り詰めた性　と協同して、ところかまはず、いつもの精神錯亂を引き起し、さして來た家の門前にありながら、ただぼんやりとしてゐる。

『有馬さんと云ふのはこなたでしようか？』

『はい、さうですよ。』

かういふ聲が耳遠く聽えるのにお鳥が氣づくと、自分は既に有馬の門前に來てゐるのであつて、車屋が自分を乘せた車のかぢ棒をまだあげたまま、ここの奥さんらしい人とうちそとの應對をしてゐる。

『はツ』と驚いて、急に胸がどぎまぎする。義雄がゐるなら、出て來るだらう。出て來れば、どんな顏をするだらう？　ここの主人とだけで交渉が出來るものなら、渠の顏などは見たくない樣な氣がする。然しまたあれだけ可愛がつて呉れてゐたことを思ひ浮べると、會ひたい樣な氣もする。また、自分はいくら會たひくツても、向ふが會はないと云へばどうしよう？　會つて、うらみを云はれるだらうか、それともまたはねつけられるだらうか？

一ときに浮んで來るそんな、こんなの考へをいだきあげて、お鳥は車夫がかぢ棒をおろした車の上につツ立ち、よろめきさうな足を踏みしめてから、車を下りる。そして、がらす戸の中に、あがり口の障子を明けて、奥さんらしい婦人が立つてゐるのをじろりと見やつただけで、通りの方を向いて衣物の裾を整へる。それから、無言で玄關のがらす戸を明け、靜かにそれを締め、靴ぬぎの方へ進み寄つて、

『田村はをりましようか』と、少し角のある調子で、出迎へてる奥さんに初めての言葉を發する。

『田村さんは只今旅行中でをられませんが――』

さう聽いて、お鳥は多年つけねらつてゐたかたきでも逸した樣にがツかりした。そして、暫らく何にも云はないで、ぼんやりしてゐる。

『あの、清水さんでいらツしやいますか？』

『はア』と、ちよツとにツこりする。然し、これが田村のめかけだと馬鹿にされるのをおそれた。

『それでは、まア、おあがりなさいませ。』

『はア』と、まだ考へ込んでゐたが、少しあひを置いて、『あの、いつ歸りましよう？』

『十日ほどで一と先づ歸ると云うて行かれましたが、昨日出られたのですから、まだなか〳〵で御座いましよう。』

『……』

『まア、おあがりなさいませ——田村さんも云ひ置いて行かれたことも御座いますから。』

『おあがりなさい』と、主人らしいのも爐ばたに坐わつたまま、兩手を後ろへついてそり返り、こちらを向いた、『いろ〳〵あなたにも話したいことがありますから。』

『では、失禮いたします。』お鳥は遠慮の氣味で、しとやかにあがつて行つた、こんなところで恥ぢ曝しをするのかと、情けない樣な氣がして。

初對面の挨拶も濟み、女の獨り旅に對する同情的な話などを聽かせられると、段段心もうち解けて來て、お鳥はただ『はア、はア』と受け答へをするばかりでなく、自分からも笑つて言葉を發する樣になつた。

然し何もかも自分のことに就いては義雄がしやべつてある樣子だから、自分としての反對な申し譯もして見たくなる。

『田村は私のことをどう云うてゐました』と、お鳥が切り出す。

『どう云ふツて』と、主人は躊躇しながら、『まだあなたを思つてるのは事實らしいが——』

『然し、わたしは人に目かけなどと思はれてるのはいやです。』お鳥はかう云つて、自分が恥辱と思つてゐることを渠等に先んじて辯解する。

『そりやア、もツともです。』

『あなた、田村さんなどおよしなさいよ。』奥さんも出し拔けに、然し初めからさう思つてゐたかのやうに忠告して呉れた。

『あなたがさういふ氣なら』と、主人はかたちを改めて、『今、家内も云ふ通りに、實は、綺麗に別れる方がいいと思ふが、ね。』

『わたしもそのつもりです』と答へたが、お鳥は夫婦とも餘り人を馬鹿にしてかかつてゐると思ふ。

『うん、それがいい、さ。』

『その方が』と、奥さんも亦、『あなたの爲めにも、田村さんの爲めにもよろしう御座います、わ。』

『無論、あなたの爲めばかりぢやアない、田村君の爲めにもなる。』

『そのつもりです』と、また繰り返したが、それは自分の爲めばかりで、田村などはどうでもいいのだと云ひたかつた。

『實際、田村は當てにならん男だ——よしんば、あなたが末長く一緒にゐようと思つてゐたにしろ、だ、僕等は無理にでもあなたを別れさせたいのだ。』

『一緒にゐようなどと思ひません。』

『それだから、云ふが』と、前置きして、主人は、義雄の思ひやりがないこと。獨りでえらがつてゐるが、人から見れば一向にえらくないこと。自然主義など唱へて、却つて世間から排斥されてゐるのを知らないこと。あんな不信用な態度で、とても、事業など出來ないこと。札幌でも、多數の人は相手にしないのを、僅かに道會議員にすがつて旅行に出たこと。毎晩毎晩女郎買ひに行つて、東京から來た原稿料などもみんな使つてしまつたから、今度歸つて來ても、直ぐ困るに相違ないこと。などを語つて、『僕のうちだツて、貧乏は分つてるのだから、さう〳〵田村の世話ばかりしてゐることは出來ないのだ。』

『田村さんは餘り無頓着で』と、奥さんも所天について、『こちらが默つて何も云はないと、いつまでも平氣でをられます。』

『いや、平氣でもかまはない、さ』と、主人は辯解がましく、『然しこツちの貧乏をも少しは助けて呉れるくらゐの考へが出なけりやア、これだけ僕も世話をしながら、友人甲斐がないわけだ。』

『ほんとに、さうですよ』と、奥さんはこちらの顏を見る。

『馬鹿だから、仕方がないのです。』お鳥自身も思ひ當らないことでもなかつたので、ひとり手に怒らないではゐられなかつた。原稿料――は、すべて自分に渡すと云つたのに――が取れたなら、こんなに困つてゐる自分に送つて來べきものを、卑しい女などに入れあげてしまつて、――きツと、さうだらうとは思つたが――餘りと云へば、實に薄情なおやぢだ！　われ知らず下くちびるを嚙むと、自分の坐わつてゐるからだが顫へ出した。そして、自分の青い顏が一しほ青くなつたやうに思はれた。

『お宿はどこになさいました？』

『停車場のそばです』と、奥さんに向つて角立つた答へをしたが、お鳥は自分ながら義雄その人に向つて直接に返事をするかの樣であつたのに氣がつき、あとから、ちよツと、夫婦に對する愛想のつもりで微笑して見せる。――そして、自分に痛みをおぼえるのと、義雄のゐない家は全く他人のところだといふ考へが起つて來たとで、坐にゐたたまらなくなつて、もぢ〳〵し出す。一方には、また、ここの主人が碌でもない面にうどんだ樣な目玉を飛び出してゐながら、男ならまだしもましな義雄のわる口を云ふのが癪になる。

且、主人がさう〳〵世話は出來ないと云つたり、細君が宿はどこだと聽いたりするのは、暗に自分をとめることが出來ないといふ意味ではないか知らんと氣をまはして見ると、『貴樣の家になど賴んでもとまるものか』と云つてやりたい樣な氣にもなる。

『ぢやア』と、主人はこちらに向つて、『五番館の前だらう？』

『さうでしよう、何でも角でした』と答へたが、お鳥は主人の横柄な云ひ振りを、この

場合、特に癪にさわつた。自分のひたへに、こんな場合よく出ると義雄から云はれる太い横じわがまた出たかと思はれたやうに、うは目づかひをしてじろりと渠の顏をにらんだ。然しひどい近眼の主人には、眼鏡をかけてゐても、それがよく分らなかつたらしい。

兎に角、魔がさした樣に、三人の氣合ひが何だか合はない樣になつて、暫らく、六疊敷の茶の間は、ただ、締めた窓のもとで人々が圍んでゐる四角爐の上で、自在鍵でつるした鐵瓶がくた〳〵云つてゐるばかりだ。

お鳥は、義雄から聽いてゐる通り、ここの主人が女學校の先生だと信じてゐるから、『このヘツぽこ教師め、こんなきたならしい家に住みながら』と、わざと一まわり室內を見まわし、『人を馬鹿にするな』と心で罵つた。自分も曾て小學校の教師をしたことがあり、また小學校教師と家を持つたことがあるのを考へてのことだ。そして、ここから見ると、また、義雄の仕事の方がまだしもましだと、不斷は貧乏してゐても、原稿料の取れた時は、義雄と共に芝居や、音樂會や、三越や、白木屋へ行つたことを思ひ浮べる。その樂しかつた思ひ出に自分は知らず〳〵耽つてゐると、突然、

『あの宿屋なら、可なりよからう。』

『……』ここで一つ意張つてやれと云ふ氣になり、つんとした口調で、『いいえ、よくもありません、商人やら、田舍者やら、下等なものばかりゐる樣で——』

『田村さんは』と、この時奧さんが云つた、『あなたがお出でになつたら、うちへとめて置いて呉れいと申されましたが、お宿がきまつてをればあなたも御不自由はないでしようし、うちでも子供がをりますものですから、ごた〳〵いたしますですので——。』

『さういふ御心配には及びません。』

『それに、田村さんも近頃はうちでとまることは全くありません——毎晩の樣にお女郎屋へ行かれましたから。』

『わたしは、もう、田村には何もかまひません。』

『して、病氣はいいのか、ね』と主人につツ込まれ、こちらはこのことまでも義雄は主人に話した、な、と思ふと、恥かしくもなると同時に、早く渠を捕へてぎゆう〳〵云はしてやりたくなる。もう、破れかぶれだとなると、

『その病氣を直して貰ひたい爲めばかりに、わたしは田村を追うて來たのです』と、かの女は自分から泣き出したくもなつて、顏の筋肉が引き釣つて來る。『あなたがたにまだあの人を思うてゐると思はれるのはつらいですが、わたしは、もう、少しも思うてなどをりません。病氣を直させるばかりです。』

『どう云ふ風にして、さ？』

『こちらで病院に入れて貰ひます。』

『そんな金アありやしない、ぜ。』

『そりやどうにかさせます』と云つたが、その金が出來なかつたら？　さうだ、自分は二人に對して氣まりが惡くなつた。そして、そのまぎらかしに微笑して見せる。

『田村さんのことですから』と、奧さんも眞顏に少し冷笑を浮べて、『何とか出來ないことはありますまいが、あなたは御病氣が直つたら、早くおよしなさいませよ。』

『はア』と進まない樣な返事をしたが、こちらの心では、お前等に云はれるまでもないことだとあざ笑つた。

『實に僕の方も困つてゐるんだ。』主人はいつも下向き加減になつて刻み煙草を呑んでゐる。それがこちらには脊蟲の人でもあると見えたので、一層渠に對する尊敬の念が薄らぎ、その何だか物思はしげなのをからかつてやる氣になり、

『田村がお金でも盜みましたか』と、吹き出しさうになつた口を無理にかたく結ぶ。

『いや、あの男は』と、主人は眞面目にうち消して、『そんなことは決してしないが――』

『では――』とお鳥は口まで出て來たのを押さへて、心でばかり、『友人のことだから

少しは世話もしてやつてよからうに。』

子供が目ざめたらしいので、奥さんは隣りの室へ行つた。それをしほにこちらは歸る挨拶をしかけると、

『まだ聽きたいことがある』と、主人は云ひとどめて、『その宿で田村の歸るまで待つてるつもりか、ね？　不意に田村が歸つて來でもして、あなたのゐどころが分らないなどいふ始末では、うちでも田村に申しわけがないから――實は、けふ、電報が二つ來た、樺太から一つ、田村から一つ。樺太からのは轉送してしまつただ、兎に角、札幌へ來てから一文も這入らなかつた事業の方がいよ〳〵見込がない意味らしかつた。その後、弟さんから僕に當てて來たハガキで、なほ更らそのわけが明かになつた。』

『では、駄目なのでしようか』と云つて、お鳥は旅行などの費用がどこから出たのだらうと、不審がる。原稿料などはさう大したものでないのを知つてゐるから別として、難局、難局といふことは幾度も手紙で聽かせられてゐたが、それは自分に仕送りをしない爲めの口實であつて、實際は、多少に拘らず、樺太から取つて使つてゐるのだらうと考へてゐた。

『駄目なことは田村も知つてゐるのだらう、この頃ぢやア、さう樺太のことを云はなくなつたから――人から見りやア、なほ更らだ。初めから、失敗は分つてゐた、さ。』

『では』と、お鳥は云ひかけて、主人が義雄をあんまり馬鹿にしてゐるので、如何に憎い人のことでも辯解してやりたくなり、暫らく言葉を押へてゐたが、云ひかけた手前もあることだから、そのあとをついで、『旅行の費用はどうしたのです？』

『それが、さ、今云ふ道會議員の遠藤に泣きついて、一緒に出かけたの、さ。』

『十日ばかりしたら、歸るにきまつてをるのですか？』

『兎に角、一と先づ歸ると云つてゐたが――今、一つの電報はあなたが來たかと尋ねて來たのだ。分らないから、握りつぶしてゐるが、ね。』

『もう、返事を出すには遲いでしよう、ね？』

『十時を過ぎたから、もう、普通電報は出せない、ね。特別あつかひにして貰つて、七十錢も出すのは無駄だらうし。』

『あす出しましようか？』

『然しまたあすになれば、その宿を立ち去つてしまうから、屆くまい――何しろ、さきへ〳〵と進んで行くのだから。』

『それでも』と、隣室から、奥さんが乳を飲ましてゐた胸をかき合せながら出て來て、『また次ぎの宿から電報が來るでしようから、その時お打ちになつたらいいでしよう。』

『それより仕かたが御座いません。』

『さうとしてだが、あなたはどうする、ね？』

『わたしは、由仁（ゆに）に兄がをりますから、その方へ行つてをります。』

山仁にゐる兄が刑事をしてゐると云ふのを力賴みに、お鳥はよく義雄をおどしつけたものだ。決して虐待ではないが、お鳥が自分の云ひ分の通せない時は、兄に云つたら、決して妹の侮辱されてゐるのを默つてゐる性質ではないぞといふことを、いつも、自分は義雄に引き合ひに出した。

その癖、義雄との關係は誰れにも云ひたくはないのである。止むを得ず、兄のところへ行つたとて、そこに籍があるのだから、早く方づけと云はれるばかりだらう。方づくにしても、病氣が直るまでは自分が承知出來ず、それかと云つて、この病氣は人にさへ語れないのであるから、兄などにはなほ更ら聽かせられない。

ただそこへ歸る必要があると云ふのは、かの女が今回の旅費を兄の知人から直ぐ返すと云つて借りて來たのであるから、當てにならない義雄などは當てにせず、兄から返して貰はなければならない。ただそれだけだ。

お鳥は、自分の現狀が兄にさへうち明けられないのを殘念になると、さうさせた義雄が今更ら憎くツて、憎くツて仕樣がない。然し、病氣の直るまでは渠に手賴らなけ

ればならないと思ふと、旅行に出てゐるといふ義雄がまた戀しくツて、戀しくツて溜らくなる。

『いツそ、直ぐ歸れと云つてやりましようか』と、こちらが云ふのに答へて主人は、

『そりやア出來ない、さ。議員に隨行する約束で洋服も拵らへたし、旅費も出させたりしたのだから、その義務が濟むまでは。』

『……』お鳥は義雄が珍らしく嫌ひな洋服を着て行つたと聽いて、どういふ服なのだらうと、その姿を想像し、獨りでちよツと微笑した。そして、何か云つて、その微笑をごまかさうとしたのが、また强い口調で、

『矢ツ張り、わたしは兄のところへ行きます。』

『兄さんがあるさうだ、ね――ぢやア、その方へ行つてるがよからう。』

『はア。』

『それがよう御座いましよう』と、奥さんも云ひ添へた。『田村さんがお歸りになつたら、直ぐお知らせしますから。』

『いえ』と、お鳥は知らせて貰つて、却つて兄に何か感づかれたら困ると思ひ、『そのうち、わたしが出て來ます。』

『さうですか』と、奥さんが妙な顏をしたのはこちらには尤もであつた、『では、歸られさうな時にまたいらツしやつたらいいでしよう。』

『さうする、さ。して、田村に會つたらよくきまりをつけて貰ふがいい。』

『また入らざらんお世話だ』と思つたが、お鳥はさうも云へず、『いづれ、また』と挨拶して、そこを出た。

お鳥は自分の待たせて置いた車に乘つた。往つた時は夢中であつたので、どこをどうとほつたか分らなかつたが、復りに注意して宿へついて見ると、僅かに二三丁しかない。而もただ眞ツ直ぐに來ればいいのだ。馬鹿〳〵しい、あるいたツて、何でもな

かつたのだと後悔する。

それに、尋ねて行つた人はゐないで、あんな變挺な近眼おやぢや細長い顔の嬶アどもに耻ぢをかかせられて來たも同前だ。人を馬鹿にして、めかけ扱ひにしやアがつた。これでも、教師をしたことがある自分だ。女學校だツて、小學校だツて、資格は違ふにせよ、教師は教師だ。あんまり人を馬鹿にする！　もう、二度と行くまい！

田村も田村だ――云はないでもいいことまでしやべつてしまひ、おのれはそれでもいいか知れないが、人のつらいことを考へて見るがいい！　馬鹿な奴だ！　取り喰らつてやるぞ！　畜生！　早く歸つて來い、早く歸つて來い！　馬鹿！　畜生！　うそつきおやぢ！　助平ぢぢイ！

敷いてある褥のそばに坐わつたまま、かう云ふことをくり返してゐたが、さて、それなら、喜んで兄のところへ行きたいかと問はれると、どうも、成るべくは行きたくない。事情をうち明けて泣きつけば、一度は怒るにきまつてゐるにせよ、まんざら、ほうつて置かれない義理であらうが、あたまを下げたうへに、しかられるなどとは氣が利かない。いやだ。如何にもいやだ。

まだ兄だけならいいが、あの他人の兄嫁がいやだ。慾張りで、輕薄で、お上手ばかり云つて――父が自分に殘して置いてくれた物までみんなおのれの物にしてゐる！　箪笥もあつた筈だ。衣物もあつた筈だ。それを何かんと云つて、ごまかしてゐる。あなたの方づく時にはあげますと、いい加減なよろこばせばかり云つてゐる。ああ、行くのもいやだ！

父さへゐて呉れれば、こんなことにはならなかつた。父が北海道を引きあげて再び紀州の和歌山へ歸つたので、自分も一緒につれられて行つた。そこで、小學校の裁縫教師をしてゐるうちに、同校の教師に云ひ寄られ、一たびは夫婦になり、自分はその人によく愛されてゐた。ぶたれたり、投ぐられたりしたが、それはただ燒き餅からであつた。自分はそれで滿足してゐたらよかつたのに――

然し和歌山の兄は始めから不服であつた。父が亡くなつてから、自分の所天がどす、御ん坊の血統だといふ評判があるを理由として、自分等を引き分けてしまつた。その時も、自分がもツと強情を張り通せば、所天についてゐられたのに――

然し自分もあんまりぶたれたりするのがいやであつたところへ持つて來て、虛榮心があつた。もツと勉強して、もツといいところへ方づきたかつた。それが爲めに、所天へは附かず、最後には兄の方へついて、今思へば、實に氣の毒な別れをした。今一度思ひ返してくれろと、一と晩中泣いてゐた。然し一たび決心した自分は、その時、氣の毒と思ふことが薄かつた。

然し兄にも面白くないので、何とも云はず再び東京へ出た。さきに矢板裁縫學校へかよつた時世話になつた關係から、田村の家を當てて來たところ、田村のお父さんも亡くなつたあとへ、あの義雄が這入つてゐた。暫らくそこに世話になつてゐるうち、何か獨りの暮しが付く樣な仕事を求めた。然し都合のいいことがなかつた。

度々桂庵へも行つたが、下女にはよ過ぎるし、小間使ひには年が多いし、いツそ、どうでしよう、かう〳〵云ふ給料の澤山取れるところがあるなど云つて、暗にめかけ奉公を勸められたこともある。

然しそんな下等なことをする氣はないので、辛抱しながら、下女やお針の見習ひに二三軒は行つて見た。然しそんなことをしてゐては肝心の勉強は出來ないと思ひ、いづれも二三日で歸つて來た。

そのうち、あの嘘つきの義雄にうまくだまされて、二年ばかり學校へやつて呉れる間の約束で一緒に住むことになつた。そして、赤坂の家、麻布の二階、あツち、こツちと引きまはされ、あの寫直學校へ這入ると自分がきめるまでに、

『裁縫學校はつまらない』と云つては琴の師匠にやられ、

『いツそ女優になつて呉れ』と云つては、女優學校へ志願してはねつけられの恥ぢを

曝らさせ、どれもこれも駄目になつた上に、あげくの果がこの病氣の苦しみだ。

『どうせ、女房にするから』と云ふので、早くさうせいと迫ると、あの氣違ひの様な嬶アにどなられて、離縁の手つづきも出來ない。そして、こちらが――約束だから――一層嚴しく催促すると、逃げ隱れてしまひ、自分を加集の様なものにまかせた。

自分が加集に許したのは、一時の止むを得ない窮策で、自分が惡いよりも、自分を棄てようとした義雄が惡いのだ。然し申しわけがないので、和歌山を出る時、いつ自殺するかも知れないと思つて、今一人の兄――醫者だ――から盜んで來て置いたアヒサンまで飲んだ。それくらゐ、こちらは思つてゐたのに――再び義雄はもとの通りになつて呉れたが、矢ツ張り、薄情だから、自分ばかり樺太へ行つてしまつて、人の困つてゐるのも返り見ない。その留守の間に自分がどんな目に會つてゐたか知れない。直接には會はないが、あの氣違ひ婆々アには蔭で自分がめかけだと云ひふらされ、女郎に賣つてしまふ方がいいと馬鹿にされた。その上、加集は加集で、勝手次第な熱を吹いてまはつたらしい。

『然し考へて見ると、みな自分が惡い――人が淺墓だといふ虚榮心に驅られたのがもとだ』と思ふと、自分がちやんと滿足して和歌山に落ちついてゐた方がよかつたのだと、もとの所天が戀しくなつて來る。

母はゐない、父もゐない。もとの所天は、もう、誰れかほかのを貰つてゐるだらう。兄や姉には、實際、會はす顔がない。

みんな自分が惡いのだ！　みんな自分の馬鹿から來たのだ！　かう思ひつめると、かの女は顔をしかめて、いつのまにか、兩手を胸に組んで入れ違ひに兩方の肩をつかんで、からだをゆすぶつてゐる。

また例の痛みがして來て、自分を眞ツ直ぐに坐わらせて置かないので、ぱツたり身を投げ出して、

『わツ』と、悔し泣きに泣いた。然し隣りの客に聽えてはと思ひ、直ぐ齒を喰ひしばつ

てせき來る聲を殺すと、からだが顫へて、痙攣を引き起した。また、いつもの癪だと思ふから、氣が遠くなるにさき立つて、ところも構はず叫んだ、

『誰れか來て下さい！』

お鳥が氣のついた時は、自分を後ろから抱いて自分の胸を番頭さんがしツかり押へてゐた。そして、客らしい人が自分の兩足を延び切らない樣に曲げてゐた。そのそばには、宿のかみさんと下女とがびツくりした樣子で立つてゐた。

きまり惡くなつたので、自分から起き直り、

『ありがたう御座います、もう直りましたから——』

『ゆツくりお休みなさる方がよろしう御座いますよ』と、かみさんが下女と共に手傳つて吳れて、お鳥に寢卷きを着かへさせて吳れる。

客と番頭とは、變な目つきをして振り返りながら出て行くのが、こちらもちよツと追ひかけた目の中に映つた。

お鳥は褥に這入つてから、獨りで今のことを考へて見ると、自分の內狀を知らない宿のものらに對しては、耻辱を感ずると云ふよりも、寧ろ一種の誇りを感ずる。

自分は病氣で癪を起した。そして、客が癪を起したのだから、宿のものが來てそれを介抱するのは當り前だ。それがとまり客に對する義務だ。その義務をつとめさせたのが如何にも愉快だ。下女ばかりを使つてやつたのではない、かみさんも來た。その上、番頭やほかの客も來て手傳つた。

『面白い、なア。』ひそかにほほゑんで、初めて耻かしい氣を出して夜着の襟へ顏を押し當てる。東京に於いて、義雄と二階借りをしてゐる時、あの人よりさきに褥へ這入り、あの人が机に向つて原稿を書いてゐる顏を見てゐると、あの人もこちらをふり向いてにこつく。それを嬉しい樣な、恥かしい樣な氣持ちになつて、夜着を引きかぶつたことがある。丁度、その時の樣なあツたかみの愉快だ。

あの客は自分の足を痛いほど押へて曲げてゐた。然しあれよりは番頭さんの方がいい男だ。

『ああ、嬉し！』自分で自分に叫んで首を竦める。そして、首を竦めると同時に、ぺろりと舌を出す。自分に氣があるのだらう、出て行く時にも、客と一緒にじろじろこちらを見てゐた。ちよツと引ツ張つてやらうか？

『おお、いやなこツた、いやなこツた！』

目を明けると、下女が壁の衣紋竹にかけて吳れたセルの單衣が、電燈の光に輝いてゐる。あれを買つて吳れた人が失敗さへしなければ、もツと〳〵立派な物を買はせてやるのに——

當地へ來て見ると、もう、セルのでも單衣物を着てゐる人はない樣だ。あの人が早く歸ればいい。直ぐ糸織りか何かの袷せを買はしてやらう。いくら困つているからツて、あれでも東京では知られてゐた文士だ。文士も金の這入る時は隨分這入る。

目が飛び出ておそろしい秋山さん、聲までが肥つてゐる須藤さん、かういふ人達は家が金持ちだから結構だが——あの小男の山田など毎月田村などよりも澤山の收入があつた。田村は初めあの人にこちらをまかせようとしたのだが、途中で惜しくなつて自分が占領したと云つた。いツそのこと、あの人についてゐた方が、獨りものでもあるし、よかつたかも知れない。

それはさうと、あの高野はどうしてゐるだらう？　助平ツたらしい顏をしてゐるが、なか〳〵親切で、すみれの花束などを芝の二階へ持つて來て吳れたツけ。

田村だツて、今でも、旅行に出られるくらゐだから、あの有馬のぢぢイめが惡口を云ふ樣な貧乏ばかりでもあるまい。たとへ、また、貧乏はしてゐても、ちよツと筆を取つて原稿を書けば、自分の小使ひぐらゐは直ぐ間に合はしてくれる筈だ。まして、今の自分の爲めに少しは一生懸命になつて吳れてもいい。

『第一、どこかの病院に入れて貰はねばならん——もう、外來患者になつてゐるのは

いやだ。』かう思ふと、入院すれば丁寧に取り扱つて貰へることが想像され、病院生活が東京の二階借りよりはずツとなつかしい樣な氣がする。そこで寢臺の上に寢起きさへしてゐれば、看護婦が來て、何でも世話はして呉れるだらう。

『こちらの病院の醫者には、どんな人がゐるだらう？』成らうことなら、上手で若くツて、親切なのが欲しい。義雄の樣なおぢイさんでなく、年の若い先生で、上手なのに手を握られるのは氣持ちのいいものだ。

それにしても、今のままでは、澤山の入院患者の中に這入つて肩みが狹い。どうしても衣物が入る。衣物だ、衣物だと思ふと、この廣い世間に、矢ツ張り、義雄よりほかに、今のところ、手賴るものはないのである。

恨んでは見るものの、おこつては見るものの、あの人は自分の爲めに隨分苦勞した。病院に通ふ費用の爲めに、自分はどれだけ渠に骨を折らせたか知れない。

この病氣さへなかつたら、もツと樂が出來てゐたし、寫眞學校の方も早く方づいてゐたに相違ない。學校や仕事の問題がぐらついてゐたのも、その實、あの人の氣が變り易いばかりではなく、自分の病氣の爲めの金を儲けるのに急がしかつたにも由らう。

寫眞學校の方も、もう直き出來あがるところであつた。あれさへ出來あがれば仕事も見付かるわけだから、あの人にさう苦勞をかけないでも濟む。今のところ、氣の毒と云へは氣の毒だが、どうしても、もたれかかるよりほかに仕方がない。

そして、遠方へ旅行してゐるので、直ぐは會へないと云ふだけに、會つたら直ぐかぶりついてやりたいほど憎かつた人が身にしみて戀しくもなる。

『今頃は、日高のどこの宿に寢てゐるだらう？』かう思ふと、自分もこの宿で獨り寢の寂しいのに思ひ合はせて、さぞ、向ふでも寂しい思ひをしてゐるのだらうと想像される。

『義雄さん、義雄さん』と、呼んで見たくなつた時、隣室の方からおほきないびきがし

てゐるのに氣がつく。男には違ひがないと、急にぞツとして、旅の宿で女の獨り寢のおそろしさを感ずる。

耳を澄ますと、そのいびきのほかに何にも聽えるものがない。汽車も眠つたのだらう。風も、街も眠つたのだらう。家の人々もみな眠つたのだらう。覺めてゐるのは自分ばかりかと思ふと、お鳥はいよ〳〵眠られない。

自分のからだ全體がおほきな寫眞レンズの樣に廣がつて、今考へてゐたことがすべて一ときにそれに映る。そして紀州、東京、北海道の青葉、紅葉、岩石、山水のさまざまな景色がごちや〳〵と暗い中にあきらかに現じ、その間を自分の父母や姉妹が、もとの所天、義雄、加集、寫眞學校の細君がある先生、年若い生徒、義雄の妻、有馬夫婦、宿の番頭などに入り交つてとほつてゐる。

範圍をどこかその一角に限らうと思つても、レンズがその全體に詰つてゐる樣で動かない。しぼりをかけやうにも、またその機械がない。寫生に出かけて、疲れた夕景の風に當る樣な、うすら寒い感じがして來たのだ。

『北海道は矢ツ張り冷える』と思ひながら、急いて最後のレンズを開らく爲めの黑い切れのつもりで、夜着を引ツかぶつても、餘りうるさくなつた思ひ出の光線が既に一面に這入つてゐて、映つたものはすべてそのままだ。

片ツ端からむしり取つてしまひたいが、手を以つて行けば、その手にも思ひ出があり、足を以つて行かうとすれば、その足にも亦記憶が存してゐる。ただぼんやりと苦み疲れて行くのをおぼえるほどに、自分なるものが引き締らない。

その間はまだしもよかつたが、またしても隣室のいびきが聽えて來ると、その客ではなく、義雄と斯うかけ隔つてゐるのがもどかしくなつて、手足のさきまで熱をおぼえると同時に、急にまた病氣を移した本人が憎くなる。

『畜生！　早く病氣を直せ！』かう叫んで、あふ向いたからだをそのまま飛びあがる樣にはねらせたが、痛みが烈しいので、『ああ、痛い、痛い』と、低い泣き聲を發して、

寢返りをする。

翌朝、遲く朝飯をすませてから、お鳥は宿屋の二階で獨り思ひに惱んだ。と云ふのは、多少衣物などの這入つてゐる行李――それがかの女の唯一の身上だ――を置いて行かうか、それとも、兄のところへ持つて行かうか、どちらとも決しかねたのである。

こちらの宿なり、有馬かたなりへ置いて置いて、若し義雄が自分を相手にしない樣なことでもあつたら、この行李もどうされるか分らない。まだ東京で渠の所謂兵站部を奔走してゐた時分、第二回の空罎を樺太へ送らなければならないのに、義雄はその工面が出來なかつた。見かねたから、自分は自分の衣物と亡き母の形見まで渡して、それを質屋へ持つて行かせた。それくらゐに盡してやつたのに、いくら催促しても、いまだにそれを出してくれないほど薄情な男である。今度また之を置いとけば、どんなことにしてしまうか分らない。

さりとて、また、兄の方へ持つて行つたら、また歸つて來る時に、こツそり持ち出すわけには行かないし――若しまた自分の不始末が分りでもすると、怒りまぎれに、これを取りあげられてしまはないとも限らない。

置いて行かうか、持つて行かうか――どちらに考へても、納まりがつかない。それをまた考へ込むほど、氣がめいつて來て、かの女は、麻の細引きでしばつたたツた一つの柳行李のそばに坐わつた切り、ただそれを見つめて、顏をしかめてゐる。

どうも、兄のところへは、義雄との決着がつくまで歸りたくない。

意張つて歸れるなら――もう、決して兄には世話にならないでもいいと安心出來るのだから――それに越したことはない。然しまた充分あたまを下げて行かなければならない次第となつたら、その時はその時で、充分あたまを下げる代りに、義雄に對する復讐をやつて貰う。

今のところ、どちらとも分らない。然し義雄は別れてしまへば他人だと云ふことに

思ひ及ぶと、持ち物は先づ兄の手もとへあづける方がいい。いよ〳〵入院出來る樣になれば、何とか兄をあざむいて、持ち出してもかまはない。

『どうせ、自分の物は自分の勝手だから』と、やうやく、さう決心した。そして、みやげに林檎を買ひ、それを持つて再び有馬の家へ行き、玄關から――もう、あがるのはいやだから――今度義雄から電報が來たら、自分が來たことと成るべく早く歸れといふことを云つてやる樣に賴んだ。

それから、宿屋の勘定をすませて、そこを出た。出る時に、帳場に坐わつてゐた例の番頭さんが丁寧に自分に挨拶する顏を、ゆふべのことを思ひ出すと共に、じろりと見てやつたが、自分の顏が赤くなつた樣に思はれたので、

『いやなこツた、いやなこツた』と、まじなひの樣に、ひそかにそれを又繰り返した。

# お鈴の家

『おれは』と、父が三人の子供をそばに据ゑて不平らしく云ふ、『新聞記者とか、雜誌記者とか、そんな評判の惡い職業のものに、娘をやるのは好かんけれど、あの色氣違ひめが』と、顎でお鈴を指し、『やかましく云ふし、それにお前達もあいつをおだてる樣に口添へするし、それで島田にとう〳〵貰つて貰ふ樣になつたのではないか？』

『だから、それでいいぢやありませんか』と、にイさんの龜一郎が四角張つて坐わりながら當らず觸らずのやうに答へる。

『それだけで濟まして置けばいいだらうが、島田をつれて、遊廓などへ行くとはどうした？』

『お父さん』と、弟は足を投げ出したまま卷煙草を吸ひながら、『たまに遊びに行くの

だから、かまはないぢやないか？』

『かまはぬことはありません』と、母はそばから弟に、云ひ聽かしてやる樣に、『お前の樣な勝手の者もない。會社へ勤めてをつた時は、兄よりも澤山給料を取りながら、交際とか何とか云ふにかこつけて、みんな遊びに使つてしまひ、やめられた今日では小使ひもおほかたないほどで、兄の世話ばかりになつてをるぢやないか？』

『遊びばかりに使つたのぢやない。』

『そりやお前の洋服とか、外套とか、靴とか』と、父がそのあとを受けて、『そんな物にはかけた樣だが、一文も兄の手助けはしてやらぬではないか？』

『龜一郎だツて』と、母がまた、『それでは苦しからう。』

『無論、さうだらう』と、父も云つた。『然しその苦しい中で、龜がまた女郎買ひに人をつれて行くとは不都合だ。』

『お父さんはまだ』と、にイさんも少し躍起となつて、『人、人ツて、他人らしく云ふけれど、自分の娘の婿になるものぢやないか？』

『それだから、なほ更ら、そんな惡いところへつれて行くのはよくない。』

『お父さん』と、また弟は冷かす樣に、『兄さんの樣な野暮天がつれて行かないでも、島田君は獨りで行くよ。』

『さういふ人に』と、母は眞顏になつて、『お鈴をやるのは、それぢやから、いやであつたのぢや。』

『今どきの人に誰れが自分の女房ばかりにかじり附いてゐるものがあらう』と、弟はさう云つてから、こちらの方を見て、『まして、あんな御面相の女ぢやないか？』

『いいことよ！』お鈴は肥えた顏が一しほふくれツ面になつてるだらうと思ひながらも、みなぎつて來た怒りを押さへ切れないで、『あなたのお世話にはなりませんから——』

『なま意氣なことは云ふな』と、弟も怒つて、『お前のおほ熱々が可哀さうだから、おれ

達が島田に頼んで、貰つて貰ふ様にしてやつたのぢやないか？――そんなに意張りやアがると、ぶち毀わしてしまうぞ――この色氣違ひめ！』

『氣違ひぢやありません！』

『氣違ひだい！』

『違ひます！』

『違はない！』

『馬鹿！』これはお鈴が自分で思はず出した云ひ過ぎだ。

『なんだ！』弟はかの女の頰へ一つ鐵拳を喰らはした。

『わツ』と、かの女はその場に倒れ、聲をすすりながら、父からして自分を氣違ひなど云ふから、兄弟までが自分をいい氣になつていじめるのだといふことを泣き訴へる。

『馬鹿！』父もお鈴を一喝して、『お前は引ツ込んどれ！』

『向ふへ行つてお出で』と、母はさすがに優しく云つて呉れて、疵でもつきはしないかとお鈴の頰を調べた上、次ぎの室へ行かせた。が、こちらが聽いてゐると、母は弟に向つて、『お前はいつも氣が荒いから行けぬ。投つたりせんでもえいぢやないか？』

『氣の荒いのアおれのせいぢやない、生れつきだ。』

『生れつきでも、自分で直す様にすれば直る。』

『それよりは、そんなら、親がおれを生む時に、優しい人間に拵らへとけばよかつたのだ。』

『馬鹿を云ふな、鶴』と、父はどなつた。『貴様の様な親不孝なことをぬかすやつア天下にないぞ。』

『現在、僕があります。』

『なんぢや！』

『おい、鶴次郎』と、にイさんが弟を制して、『お前の言葉は餘りよくない。』

『よくないもあるもあつたものかい、今の問題はお前が女郎買ひに行つたことぢやないか？』

『おればかりぢやない、お前も行つた。』

『僕はいつものことだ。』

『そのいつもがよくない――まア、考へて見い。僕だツて、まだ獨り者だから、行きたくないことはない、さ。然し兩親もあれば、おととやいもとがあつて、その世話をする責任がある身だ。こないだ行つたのなどは、ただ、お鈴のことが解決した嬉しさにふツと氣が變つて行つたばかりで――二度と再び行くつもりぢやない。』

『それが本當です』と、母は贊成する樣に云ふ。『然しお鈴ぢやて、まだいよ〳〵きまつたと云ふのぢやない。島田さんの兄さんがまだちやんと承知せぬぢやないか？』

『お母さん』と、にイさんは、『それは心配に及びません。當分わけがあるので、島田君が呑み込んでをりますから。』

『それはさうとして置いてぢや、云はば龜の方は』と、父もそのあとについておとうとに對して云ふ、『滅多に行かないのだから、まだしも許すべきところがある。親達を世話する上に、まだお鈴といふ厄介物をひかへてをるので、お前の樣に油斷はしてをらぬ。』

『實際、僕の樣な薄給者のところへ』と、にイさんも皆に不平を云ふならこんな時だと云はぬばかりで、然し餘り角の立たない樣に、誰れにともなく、然し、まア、弟にだらう、『お鈴のゐる間は、妻に來手がある筈はないではないか！　銀行では、思つた樣に金は呉れんし、住ひから云ふても、さ、二間や三間のところに、ふた親もをれば、お鈴もお前もをる。この上、をりどころがない。』

『もツともぢや！』これは母の涙を呑んだやうな聲である。

『まア、龜の方はよいとしても』と、父もにイさんの言葉には同情して、『鶴次郎も少しこれから氣をつけい。』

『なアるほど！』弟の返事が如何にも憎い。

『なるほどとは何のことだ』と、にイさんが怒つた。『親やおれの云ふことが分らないのか？』

『分つてるからをかしいんだい。もツと高い給料が取れないのか？』

『人を馬鹿にするな、鶴？　そりやア、お前はおれよりも高い給料を取つてをつたらうが、今はおれの居候ぢやないか？』

『なにをぬかす、この野郎！』弟はいつも自分より力も弱いと見てゐる兄に飛び附いた様子だ。

兩親が引き分けようとしても、手に合はぬらしい——

『この野郎！』

『畜生！』と、どたん、ばたんやつてゐるので、お鈴はこツそり自分で氣を利かして隣りの雜誌社へ來てゐる自分の好きな氷峰さんを呼んで來た。

渠が二人を引き分け、この家族の人々から、すべてその行きがかりの説明やら、不平やら、訴へやら、小言やらを聽いて呉れた。それから、

『僕が全く惡かつたんです』と、先づこちらの兩親へじやうずな詫びを云ふと、

『いや、それは僕の方だ。』にイさんがまた氷峰さんにあやまりを云ふ。

『僕も失敬した』と、弟も挨拶する。

皆がこちらの顏に氣がついた時、左りの頰ツぺたが脹れあがつてゐることが自分にも分つた。手を當てて見ると、たださへ肥えてゐるのが、その脹れあがつたので、左りだけまた特別に飛び出してゐる。

『片ゑくぼでは無うて、片お多福ぢや』と、弟がまた俄師の口調で惡口を云ふ。然しこれには氷峰さんまでが皆と共に吹き出した。こちらはただじツと恨めしさうにして惡口屋の顏をねめつける。

『これから亂暴なことはするのぢやありません。』笑ひながらも母がいましめると、
『ほんとにさうだ、鶴の亂暴にも困る』と、父がつぶやく。
それから、氷峰さんは雜誌の第二號原稿の取りまとめが忙がしいことを語り、金主の川崎との折り合ひがどうも面白くないこと。さりとて、今の雇ひ人同樣な地位で、いつやめられるか分らないのに、自分として自分の同情者等から寄附金を募集するのはあとで若し自分が一個でやり出さなければならない樣な時の爲めによくないこと。社員全體が約束だけの給料を取れないので困つてゐること。それでも原稿の方は豐富な見込みがあり、田村さんも『金』といふ短篇小說を書いて呉れたから、龜一郎と鶴次郎にも銀行や木材のことを早く書いて呉れろと云ふこと。などを語り賴んで、歸つて行つた。
氷峰さんが歸つたあとでは、矢ツ張り、兄弟三人の間の心が解けてゐない。そんなことで、晩の御はんがおそくなつたが、お互ひに氣まづくそれを濟ませた。

『一體、誰れが親にそんな入らざらんことを告げたのだ？』
『お鈴に決つてらア、ね』と、にイさんが弟に答へる。
『よくない事だから』と、こちらもまけない氣になつて、『お母さんに注意したのです。』
『そんな心配を親にかけないでもえいぢやないか』と、にイさんのお叱りだ。『おれは田村さんの樣にうつつを拔かす男ではない。』
『それでもうちの爲めにならぬから——』
『けちな女郎だ！』弟も、もう手は出さなかつたが、『家の經濟々々と云つてるばかりが女の職分ぢやない——交際と云ふことがあらア。どこまでも厄介な女だ。』
『あなたはまた交際々々と云つて、その實、無駄使ひをするんです。』
『それはお鈴の云ふ通りです』と、母も弟に反對する。
弟は少ししよげたやうにして、そのまぎらしに浪花節の一句を語りながら、自分の室へ獨りランプを持つて引ツ込んで行つた。そして、障子をぱたりと强く締めてから、

『島田のおばさん』と云つて、べろり長い舌を出した影の障子に映るのがこちらへも見えた。

『……』お鈴は自分でそれを見て、水を打たれた様にひやりと恥かしみを感じ、それと同時に、また自分の住み慣れた家がも早や自分の家でない様に思はれた。

# 氷峰の斷片

氷峰は自分の結婚問題を解決する爲め、その兄(お君の父)を夕張炭山に音づれた。

この兄の全盛時代には、氷峰もそこに厄介になり、中學をやつてゐたので、ちいさいお君と共に大盡の家族として人々からなか〳〵尊敬されたものだ。兄夫婦には、この少女と少年とを初めから夫婦にしようといふ氣があつたのだらう。氷峰を弟としてでなく、殆んどわが子も同様に養つてゐたのだ。そして、氷峰に、學費のほかの小使ひ錢を與へるにしても、渠が學生に不相應な立派な洋服の隱くしから學友にばら〳〵と銀貨を、重いから邪魔だと云つて、ふり撒いてやつたほど、充分に與へてあつた。

その時代に、氷峰が北海道に於ける中流以上の令孃、令夫人などの暗黑面を知り得たのは、渠がそんな時代の少年にあり勝な小間癪れた不身持ちなどからではなく、却

つて年の割に情を解しなかつたからである。渠が
『無情漢！』『唐變木！』『石部金吉！』
などと、からかはれて怒り出すのを面白がり、若い夫人連や年頃の跳ね過ぎた令嬢ども、わざと、渠の前で閨門のことや浮れ話などを爲し、渠のまだ起らない情を起してやらうとした。甚だしいのは、夜中、渠の室に忍び込み、渠をおもちやにするつもりで、女の方が重大な失敗を演じたこともある。

さういふ婦人連は、今では、渠の兄の失敗とは反對に、いづれも歴々の家に方づいてゐて、地方の愛國婦人會の役員やら、眞面目腐つた奥さんになつて澄ましてゐる。が、氷峰に會へば、あたまがあがらないばかりではない。渠は、渠等の澄ましてゐるのを見聞きする度毎に、社會の暗黑面を呪ふことがあるのだ。

渠の兄、島田多助と云ふのは非常に豪放な男で、金を貯へて置くといふ樣なけちな考へがなかつたので、儲かれば儲かるだけ使つてしまつた。或時などは、わざ〳〵札幌へ出て來て、札幌中の遊女をすべて一と晩中買ひ切り、山の人々並びにその關係者等を勝手に遊ばせたこともある。然し、今では、ただ小い炭鑛に顧問として雇はれ、僅かに一家を維持してゐる。

その兄に氷峰が相談を持ちかけると、兄は不斷にも似ず嚴肅な態度で、
『どれを貰ひたいと云ふのぢや』と聽く。
『どれと云ふて、きまつてをるから』と、こちらは云ひよどむ。
『おれの方では皆分つてをるぞ。』どこからは斯う云つて來てゐる、かしこからはあの云つてよこしたと、氷峰自身もまだ知らなかつたことまで話す。

その數々の中には、二三年來待つてゐるといふ十勝の女のもある。臨月の女のもある。若杉貞子の問ひ合せもある。また、仲人氣取りで申し込んで來てゐるのも二三口ある。

『色男ア仕やうがない、なア』と、兄から半ば詰責らしく云はれ、

『は、はッ！』こちらは笑つて、兩手をあたまへ持つて行かざるを得なかつた。

『然し、姉さんか知つてをる筈ぢやが、この最近のが一番適當だと思ふから』と、氷峰は原口お鈴のことを一層詳しく說明する。

『ふん、ふん』と云ひながら、兄もおとなしく聽いてはゐたが、こちらの言葉が切れると、『然し、まア、もツと考へて見たらよからう。』

兄が一向乘り氣にならないので、氷峰も實は閉口してしまつた。そして、それ以上に反抗的な決心も見せかねた。と云ふのは、兄のこれまでの世話をありがたく思つてのことよりも、兄の承諾を得なければ、今のところ、結婚費が出ないのだ。

一大雜誌――而も今賣り込み立てのだ――の主筆としては、犬猫を貰ふ樣にこそこそとその式をしてしまうことは出來ない。そして、また、兄がいよ〳〵承諾すれば、とても、札幌中――大きく云へば、北海道中――の注意を引くだけのことはしなければ承知出來まい。

自分は豐平館か、伊藤公のとまつた幾代亭で、園遊會ぐらゐはしようと思ふ。然らざれば、大黑座かどこかで、一つ突飛な計劃をして、結婚披露の大演說會でもやらうと考へてゐる。

何にしても、さきに立つ物は金だ。そして、今の場合、自分の名義になつてゐる山の家を賣り飛ばすよりほかに道がない。然しそれも兄の承諾がなければ駄目なことだ。

『まア、もツと時機を待つて實行しよう』と、氷峰は心で斯う云つた。そして、お鈴のことはそのまま口をつぐむ。

『にイさん』と、そこへお君が出て來かかつたのを、兄は、

『今、お前の來るところぢやない』と叱りつけて、立ち去らしめた。そして、

『あのお君はどうするつもりぢや？』

『さア、妹ぢやから――』氷峰は幼少の頃から呼んでるこの言葉を楯にして兄のかほ

色を窺ふ。

氷峰は兄がさう云ふつもりで自分をよく世話して呉れたのだといふことを知つてゐる。叔父と姪との間がらでも、昔の歴史にはあることだ。また女郎や藝者を買ふとしたら、いつ、どこで、近親のものに接するかも知れないと云はれたこともおぼえてゐる。然し實際の姪――而も兄妹として親んで來たもの――を自分のいよ〳〵の問題にはしたくない。孕んでるらしいお君の切ない心のうちも、これまでのことに面して、思ひやらないのではないが、どうしても、それだけは實行出來ない。

お君の方にしてもだ、離れてゐればこそ、毎日の様に色文らしいものをよこすが、一緒にゐる間は、どちらもわがまま勝手に別々なことを云つて、殆ど全く男に對する女の情らしい物は見えない。夕張にゐた時もさうだ。十勝にゐた時もさうだ。最近、札幌にゐた時もさうだ。

それに、近親結婚は不具者や無能力者を産する恐れがあるといふ生理上の結果などを考へると、薄氣味も悪い。兩親とても、今では、それくらゐのことは分つてゐるに相違ない。ただ、子の愛に引かされて、もとの通りの思ひつきをまがりなりにも押し通さうとしてゐるのだ。

かう思ふと、早くお君を鎌倉かどこかの親戚へ遠ざけて、よその男に氣を換へる様にしなければならない様だ。

『先づこの問題を實行さす様にしよう』と思ひつく。その日は、然し、何も云はず『考へて見よう』とばかり答へた。

『まア、一と晩とまつて行け』とすすめられたが、然し、けふとまつては、それこそのツ引きならぬ羽目に落ち入るかも知れないと思つたから、雜誌の用がいそがしいにかこつけ、氷峯はゆふ方の汽車で札幌へ歸つて來た。

# 勇の家庭

『田村と云ふ奴はああいふ性質だから、氣にしないでもいいよ』と、勇は自分の妻をなだめるやうに云ふ。渠はぼんやりと茶の間のはづれの敷居の上に立つてゐる。

『でも、わたしは何だか好かない。』お綱は流しもとの上で何かを切りながら立ち話だ。『あなたの古いお友達で、手紙の上では長く知つてをりますから、何も惡く取り扱ふつもりでは御坐いませんが、とても無遠慮な人です、ね。』

『無遠慮だけに、正直な男、さ。』

『正直は正直でよう御坐いますが、あんなにつけ〳〵云はれると、いやになつてしまいます、わ――こないだの時は、さうにも思はなかつたけれど。』

『そりやア、せんは、きやつに取つて大希望と大野心とがあつたからまだしもだが、失



敗して來たとすりやア、多少氣が氣でならないところもあらう。破れかぶれになつてる點も見える。』

『氣の毒は氣の毒です、ね。』

『ああ呑氣にかまへてゐる樣だが、心では隨分つらいことがあらうよ。細君を嫌ふのは、自分よりも年寄りであるからだが、それは今何ともしやうがない。よく慰めて、東京へ歸してやるがいい、さ。』

『いつまでうちにゐる氣でしよう？』

『まア、暫らくは默つて、勝手にさして置く、さ。まだよく聽いて見なけりやア分らないが、どうせ、失敗の取り返しはつくまいから、歸るより仕かたがなからう。』

『小樽の鰊取りなど當てにしてゐる樣では、田村さんもまだ事業には慣れてません、ね。』

『さうお前の云ふ樣でもないか知れん――ぽツかりと、うまくぶつからないとも限ら

ない。』

『さう、うまいことがありますものか？』

『もツとも、事業に就いては』と、渠は自分の妻の里が木材で失敗したことを思ひ出して、『お前の方が確かによく知つてるだらうが――まア、「窮鳥ふところに入る」だ、よくもて爲して置く、さ。』

かう寛大に表面では云つたものの、これは妻をして古い友人に粗相させまいと思ふからで、勇も自分自身では一と方ならず心配が出來たのである。そして、一人ぐらゐの飛び込み客がある爲め、自分の家の生活問題を心配しなければならない樣な境遇が情けなくなる。

『田村君の云ふ通り、教師ほどつまらないものはない』と考へる。以前の樣に、獨り者で、二三年毎に方々の學校へ飛び歩いてゐた時は、まだしもかはつた風景や人情風俗に接するだけ樂しみもあつたが、ここで家を持つてからは、七年も八年も同じ學校で同じ教科書や作文を教へ、俸給も亦殆ど同じ程度にとどまつてゐる。

もと自分に教はつた生徒が大學生になり、學士になり、高等官になつて、たま〳〵自慢さうにこの自分のところへやつて來て、『先生、先生』と云ふのを聽くと、何だか自分が意久地なし、無能力者とあざけられる樣な氣がする。――自分はまだ自分の教へた生徒が自分よりもえらくなるのを喜んで見てゐるほど、耄碌はしてゐないと思ふからである。

教へた生徒でさへさうだもの、自分の友人や同窓にして、他の職業に就いたものは、少くとも、軍人なら大佐、官吏なら事務官、會社なら取り締り、商人なら拾萬以上の身代になつてゐるものがある。その上、渠等には、自分の樣な親なし、親類なしとは違つて、いろんなあと押しや手づるもついてゐる。獨りで意張つてゐるものがあつても、親の財産や家柄を相續してゐるものだ。

渠等のうち、自分が田村と共有してゐる友人もあるが、田村も自分も、今から如何に奮發して見たところで、渠等と同じ地位にはのぼれまい。田村がそんな方面とは違つた自由な文學で名を出したのは、渠に取つては止むを得ない明策だし、また渠等に對する反抗として、最も面白いと勇は考へたこともある。

田村が世人の所謂お調子に乘り、家庭のことを閑却して、女を拵らへたり、また突飛な事業に手を出すことを初めて聽いた時は、その人物の變はつたのを驚いたが、自分の無變化にして、單調な生活をやつてゐるのに比べて見ると、餘ほど渠の方が自由で、愉快だらうと、勇はまた考へ加へた。

三ケ月以前に、田村に自分のつまらない境遇を語り、田村義雄なるものが勇の心に新たに刻み込まれてからは、勇は義雄をうらやましくて溜らなかつたのだ。

自分も義雄のあとについて何か一つやつて見たい。樺太へ行つて、いやな教師でも出來るものなら、それをしながら、何かいい仕事に移つて行きたい。と、かう打ち明けた時、希望に滿ち滿ちてゐた義雄は、

『今少し辛抱してゐ給へ、僕にも考へがあるから』と云つて、先づ蟹の罐詰に成功してから、樺太にはころがつてゐても人が採らないと云ふ海栗の製造やら、荒蕪地の開墾やら、牧畜業やらをもやるつもりだといふことを語つた。まだ空想には違ひなかつたが、こちらにはそれが樂しいまた頼母しい空想として受け取れたのであつた。

義雄が樺太からたよりをよこさない——實は、渠は手紙を一度出したのであるが、途中で紛失したのか、こちらへ屆かなかつた——間も、渠の言葉がうまく實行されつつあるか、どうかと、毎日學校を勤めて歸つて來る毎に、この爐ばたに坐わつて考へたのだ。

時々、それを夢にまで見た。

この樂しい夢は、義雄の歸來と共に覺めてしまつた。そして、自分は矢張り、十年一日の如く、この爐ばたにこびり附いた人間だといふことを發見した。

そして、義雄の失敗は大きいだけまだ變化があるだらうが、勇自身のたださへ寂しい生活は、たま〳〵ともつた火が直ぐ消えてしまつた樣に、一しほ寂しい氣がした。

そして、渠は義雄の事業の一部分を引き受けてゐたかの樣に、世の中のことは思ふままにならないものだと、今更らの如く厭世的な悲觀を感じてゐる。

そこへ、がた〳〵と、そとから二人の子供が歸つて來た。ふと氣がつくと、自分はいつもの通り、窓に向つて、爐ばたに坐わり、がん首のまがつてしまつた短い煙管で煙草を吹かしてゐる。

『煙管を買ひ換へようとしても、それだけのことにさへこの頃は手がまわらない。』こんなことを考へながらも、忙しい事務の間に段々喫ひおぼえた煙草の味だけは忘れられないのだ。

『有馬君の近眼と煙草とは何か關係がありさうだぜ。』曾て同僚にひやかされたことを思ひ出す。渠には、近眼的な擧動と煙草好きなことが非常に人の目に立つのである。

『有馬君の目に近眼のやにがくツついてゐるとすれば、喉には煙草のニコチンがこびりついてゐるだらう』などと。これは自分を何か冷評する言葉であるとは思へたが、勇自身に取つては、――近視眼の方は、それが爲めに教室全部を見渡すことが出來ず、自然下向き勝ちになり、うしろの席にゐる生徒がわざと踊つたり、跳ねたり、拳を打つたりするのを知らなかつた故を以つて、教師として不行屆きだと、校長に叱責せられたことがあるが、――人並みはづれて刻み煙草を呑むことが、一つの贅澤として、唯一の自慢と誇りとになつてゐる。

けふに限つて、子供が左右から取りつくのを左ほど可愛いとも思はない。

『お父ちやん』と云つて、房子が後ろから兩手で目かくしをしようとするのを拂ひのけた。

『こら、馬鹿野郎』と云つて、一太郎が手を引ッ張つて、横へ引き倒さうとするのを

ふり放した。

『うるさい、うるさい』と、やわらかにだが叱りつけ、煙草を喫ひながら、勇は何だか義雄の歸りを待たれる樣な氣がしてならないのだ。『田村はどうしたんだらう？』渠は今用をしまつて爐の火を直しに來たお綱に聽くと、

『今に歸られましよう』と、かの女もそこに落ちついて、うちわを使ふ。そして、樺太の冬を思ひ浮べたかして、『冬になれば、あちらは北海道よりも寒いでしよう、ね。』

かの女には、冬といふことが、この夏の暑い時に思ひ出されても、いやで〳〵溜らないやうだ。そして、また、勇は、その妻に冬のことを云はれると、この僻地からかの女の望み通りかの女を脫しさせることが出來ない境遇をいつも思ひ出し、自分の不甲斐なさを心で感ぜずにはゐられないのだ。

『人間が住んでゐられるのだから、寒いたツて知れてらア、ね』と、勇はまぎらかしに答へ、『若し田村君が成功して、おれもその方へ行くことになつたとすりやア、お前はどうするつもりであつた？』

『おかねだけ送つて貰つて』と、お綱はこちらを見て微笑しながら、『わたしは子供と一緒に東京の兄さんのところへ行きます、わ。』

『勝手なことをいやアがる。』勇も笑つて、『別におれが女を拵らへたらどうする？』

『かまひませんとも——子供を育てるだけのおかねさへあれば。』かうお綱は云つて主人が東京へ轉任出來ない日頃の鬱憤を多少漏らし得たと云ふやうな樣子をする。

『それだから、田村の婦人論が初まるやうになるのだ。そんな考へで以つて、眞實に亭主を愛してゐるとア云へまい。』

『田村さんのお株を取つたのですか？』

『は、は』と、勇も自分の妻の笑ひにつり込まれた。

大正八年九月二十一日印刷
大正八年九月二十八日發行

定價金壹圓貳拾錢（定價金壹圓）

著作者　岩野泡鳴

發行者　東京市牛込區矢來町三番地中の丸　佐藤義亮

發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話番町（八〇九番）（八九九番）

振替（東京）一七四二番

印刷所　東京市神田區宮本町五　電話下谷（四〇六七番）　新潮社印刷部
印刷者　高橋治一

斷橋

日本の文壇が生める唯美派藝術として
世界に誇るべきものを此の一卷に求めよ

永井荷風氏序
谷崎潤一郎氏著

# 近代情痴集

裝幀は、小村畫伯の苦心に成り、明治初年の出物版に擬して、特異の美觀をなせるの點、亦近時出版界の一驚異たらむ。

新刊 出來

▼大版特製挿畫十五頁
▼定價 壹圓六拾錢
▼郵送料 拾錢

□天下の奇書□

現文壇を二分してその浪漫派の領域に君臨する者は、我が谷崎潤一郎氏也。本書「近代情痴集」と云ふ、題目既に尋常にあらず、内容の常套を絶せるものたるは、何人も推想し得ん。肉に眼覺めたる少年が、一妖婦の美の魅惑に逢うて、たとへば牡丹の蕋に溺るゝ蜂の如く、喜んでその毒手に、陶醉の死を死ぬる『戀を知る頃』、豐麗の美女に好色の老爺を配してマソヒズムの極致を表はせる『富美子の足』を始めとして世の常ならぬ戀と罪とを描ける諸名篇を收め、更に附するに『異國綺談』を以てし、怪奇なる幻想を清新なる異國情調に糾へる『西湖の月』以下三傑作を蒐めたり。谷崎氏の作風は瑰麗にして芳醇、しかも亦深刻にして凄愴、たとへば毒草の花の、毒愈々深くして色益々濃かなるに似たり。日本の文壇が生める唯美派藝術として正に世界に誇るに足るべきもの、此の一卷に於て盡くせる也。

佐藤春夫氏著

# 改作 田園の憂鬱

——著者裝幀極美本——

三版出來

背皮總洋裝
定價壹圓貳拾錢
郵送料八錢

「田園の憂鬱」或は「病める薔薇」は、佐藤春夫氏の出世作にして亦その代表作と目すべきもの也。村居一年、靜かに田園の自然に親みて、鋭敏なる近代人的神經、豐富なる天才的情感、而して纖細巧緻を極めたる文章、具さに其の觀察し、冥想し、感得せる所を描けるものにして、通篇珠玉の如き文字を以て成れる長篇散文詩。田山花袋氏が、初めて見たる新人の筆と激賞し、文壇擧つて眼を瞠れる驚異的の作品也。昨夏一たび書册となりて世に出でしが、作者はその慊らざる點あまりに多しとなし、今回大訂正大增補を加へ、全然面目を一變して公にせられたり。

須藤鐘一著

# 傷める花片

第二版出來
壹圓拾錢 送料八錢

新進中の新進須藤氏の創作集にして、何れも傷める花片を以て象徴せらるゝ惱み多く悲み滋き生活に材をとれるもの。或は、美貌の一少婦が病の爲に容色を失ひ、愛人の愛を失はんを恐るゝあまり、殺人の大罪を犯すに至るの徑路を描き、或は、友の美しき未亡人と俊爽多恨の一青年との情事を描く等その内容極めて多趣、描寫亦細緻を極む。

# 新進作家叢書

1 新らしき家　武者小路實篤
2 恐ろしき結婚　里見　弴
3 生あらば　豐島與志雄
4 大津順吉　志賀直哉
5 生と死の愛　谷崎精二
6 結婚の前　長與善郎
7 暴君へ　有島生馬
8 煙草と惡魔　芥川龍之介
9 夢と六月　相馬泰三
10 手品師　久米正雄
11 一つの芽生　中條百合子
12 神經病時代　廣津和郎
13 愛と憎み　江馬修
14 土の靈　野村愛正
15 無名作家の日記　菊池寛
16 お絹とその兄弟　佐藤春夫
17 赤い矢帆　矢口渙

以下續々發行

定價一冊四十錢づゝ　＊　送料一冊四錢づゝ

# 有島武郎著作集

有島氏が作中の精粹を拔きて此の五卷の中に網羅せり

(1) 死　(廿一版)
少女の死を描いて滿眼の涙、よく其の透明の觀察を妨げざる『お末の死』、人生最高の意義に觸れたる傑作『死と其前後』、及び『平凡人の手紙』等、死を題材とせるものを收む

(2) 宣言　(廿四版)
悲愴なる戀の物語也。高潔なる精神と燃ゆる如き情熱を有する一青年が身にも換へて愛する約婚の少女を如何にして其の友の手に委せるかの徑路を描いて沈痛を極む。

(3) カインの末裔　(十九版)
作者の手腕を文壇の一般に認めしめたる最初の作にして其の全作中の一面を代表せる傑作。外に『實驗室』『凱旋』『クヽラの出家』等何れも作者の特色豐かなるものを集む。

(4) 叛逆者　(十八版)
近代的生活の創始者にして人生の未來に對し暗示深き教訓を與へたる藝術家ロダンレー、ホイットマンの三氏に就き、憧憬讃美の心を寄せたる著者獨自の感想文也。

(5) 迷路　(廿一版)
異境に放浪して肉の呻きと靈の喘ぎとに悶ゆる一青年を主人公とし、妖艶淫蕩なる一夫人の情生活の曲折を配して沈痛華麗、二百四十枚に亘る長篇小說也。(價八拾錢、送料六錢)

一冊五十五錢　郵送料六錢づゝ

佛國文豪アレキサンダア・ヂユウマ著
谷崎精二氏 三上於菟吉氏共譯

# モントクリスト伯爵

全二冊 前編出來

總洋布特製美本 一冊壹圓七十錢 郵送料十錢

**世界稀有の大藝術品にして而も其の興味の豐かなること亦眞に無比大探偵小說を讀むの感あり**

佛蘭西浪漫派の作家にして、ユーゴーにつぐ大立物は、實に、アレキサンダア・ヂユウマ也。而してヂユウマが數多き小說中、其代表作として**世界の讀書界を風靡**しつゝあるを「モントクリスト伯爵」の一篇となす。荒灘上の一巖窟裡に匿藏せられたる大金あり、聖僧、勇士、美姫、奸人、さまゝの人物の其れを中心として活躍するところ、波瀾重疊して具さに傳奇小說の興趣限りなきを示せり。通俗の妙、やゝもすれば藝術の眞を害ふもの多きが中に、兩者併せ得たる、此の篇の如きは寔に少し。淚香小史の『巖窟王』夙に世に行はるゝも、童幼の爲めにせる抄譯に過ぎず。その藝術としての眞價に至つては、此の全譯を待つて始めて知る可きのみ。

米國セルチェル氏編 第一編

# 露國十六文豪集

衛藤利夫氏譯

忽三版

## 世界短篇傑作叢書

■總洋布製▼定價壹圓貳拾錢 送料拾錢■

■下記の十六文豪の代表的短篇を集錄せり

■一卷以て露西亞文學の全面容を知る可く

■露文學發達の跡を見る可き實物鳥瞰圖也

■露文學に關する編者の雄大なる論文あり

■編者は米國に於ける露文學研究の權威也

■最も便利なる近代露文學總覽と云ふ可し

第二編▼英米文豪短篇集（目下印刷中）

第三編▼佛蘭西文豪短篇集（目下印刷中）

プーシキン　ゴーゴリ　ツルゲーネフ　ドストエフスキー　トルストイ　サルチーコフ　コロレンコー　ガルシン　チエホフ　ソログーブ　ポタペンコー　セミヨーノフ　ゴーリキイ　アンドレーフ　アルチバーセフ　クープリン

## サアニン（縮刷）

中島清氏譯

中版總洋布▼價壹圓六拾錢
六百五十頁▼郵送料八錢

若き美しき處女と青年との一團の中に、大膽なる個人主義者サアニンを置きて、その相交錯せる戀愛生活の裏に、思ひ切つたる肉の禍者を說く。世、斯くの如く性慾生活を描いて大膽なるものあるなし。而してその眩惑的なる濃厚の色彩と、その陶醉的なる芳烈の香氣とを以て、奔放なる新人生觀を裝ふところ、寔に、無類の作品也。基督敎に比較されたる異端主義、習俗の固陋に比較されたる偶像破壞主義、而して凡庸に比較されたる超人主義——新しき露西亞が叫べる此の新しき聲を聞いて、自己現前の問題の一ヒントを得ざる可からず。

## ランデの死

原白光氏譯

中版總洋布▼價壹圓貳拾錢
三百八十頁▼送料八錢

一人の人道主義者の其の主義に殉じたる悲痛の死を描けるものにして、此作者の代表作の一つ也。月夜の逍遙、螢火明滅する闇夜の接吻、瀕死の病人の黑き呻き、若く美しき處女の肉の惱み、生活の蠱惑と冒險——その大體の構圖に於て、肉の香の高きに於て、最も『サアニン』に類似せるもの也。附錄に『惡人』『深淵』『死よりも强し』『不治病院』の四篇を收む。いづれも高名の作のみ也。



## 勞働者セヰリオフ

忽ち三版

■露西亞の大革命を題材■
■とせる傑作小說の集也■

中島清氏譯

中版總洋布▼價壹圓貳拾錢
紙數四百頁▼郵送料拾錢

『サアニン』の作者として聞ゆる露西亞現下文壇の第一人者ミハイル・アルツイバアセフが、一九〇五年の露西亞革命の心理を取扱へる一篇即ち、この『勞働者セヰリオフ』である。セヰリオフは、熾烈なる情熱を以てその男性的意氣地を鍛へ、崇高なる理想を以てその獻身的精神を打成せる一革命主義者である。彼がいかに思考し、いかに行動し、いかにその悲劇的最後を遂げたか、作者獨得の清新潑剌の筆は、直に人に迫るの實感を以てよくそれを描破してゐる。附錄として、一九一六年の露西亞大革命を題材とせる「朝の影」「血の痕」「醫者」等の諸篇を添ゆ。『サアニン』に於いて虛無主義者としての彼を見たる讀者は、此の書に、革命家としての彼の又別箇なる面目を觀て、坐ろに肉躍り血湧くのおもひをなすであらう。玆に『サアニン』の譯者中島氏再び其の健筆を呵して此の世界的佳篇を譯出す、時節柄興味の更に一層なるものがあらう。

ユーゴー著　豐島與志雄譯　第三巻迄既刊

# レ・ミゼラブル

全四冊

▼總洋布箱入最上製
▼總紙數二千七百頁
▼一冊價壹圓八拾錢
▼郵送料　一冊　八錢

是れ佛蘭西近代浪漫派の巨匠ユーゴーの代表作にして、邦文に譯して堂々四千枚の一大長篇也。その抱懷をジャン・ヴァルジアンなる一人物に寓して、波瀾多き慘苦の生涯を曲盡するの間、當時社會の各方面に、炬の如き批評の眼を放つ。全篇を貫いて鏗鏘として鳴るものは實に作者が濟生愛民の大精神にして、人道主義の大理想也。或はワーテルロオの戰場に千軍萬馬を叱咤する大ナポレオンを描き、或はパリの陋巷に、命運の哀しきに泣く一賣春婦を描く。幾十の人物、幾百の情景、その結構の複雜にして、規模の雄大なる、近代小說中これに匹敵し得ぬものは、獨りトルストイの『戰爭と平和』あるのみならむ。新進作家の雄にして、少壯佛文學者たる豐島氏直ちに佛の原文より譯出せらる。我文壇、始めてユーゴーの眞面目を見るを得む也。

◎ユーゴー原作　徳田秋聲氏譯編

# 哀史物語

縮刷　再版　定價五拾八錢　郵送料六錢

『レ・ミゼラブル』の精髓を小形の美本二百五十頁の間に撮みて、一讀下、直ちに原作の大綱を知り、原作の妙味を味ふことを得せしむる、極めて便利なる書なり。

## ツルゲーネフ全集

| (1) 獵人日記 | (2) ルーヂン | (3) 初戀 | (4) その前夜 | (5) 煙 | (6) 父と子 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生田長江譯 | 田中純譯 | 生田春月譯 | 田中純譯 | 大貫晶川譯 | 谷崎精二譯 |
| 自然と風物と民情との纖細精緻なるスケッチの一大集粹にして作者の特技たる戀愛描寫は、其自然描寫と共に、叢中の花の如く點綴せらる（價一圓七十錢） | ルーヂンと云ふ多情多感の人物と、ルーヂンに戀せる少女ナタリヤとを描きて、戀愛文學者としての作者の手腕を遺憾なく發揮せるもの也。 | 作者得意の戀物語。附錄には、妖麗の女優が淸純の青年と相擁して死に至る『クララミリッチ』及び深刻を極むる『ファフスト』の二傑作あり。 | 慨然として故國の難に赴ける志士インサロフを情人として、火の如き戀を高き理想にあざなへる少女ナタアシヤの、活けるが如き描寫を見よ。 | 艶麗哀切なる戀物語にして零落せる貴族の娘と若き大學生との間に結ばれたる情思を經とし、露西亞四十年代の時代の苦悶を緯として描く。 | 原作者の作中最も多く讀まれ、又最も意味深きものとして喧傳せらる。個人主義と虛無主義と、作中の主人公に貫く此の精神を看よ。（價一圓二十錢） |

價一圓＊送料八錢づゝ

# 人と藝術叢書

海外諸文豪の日記書簡回想記の類を輯め裏面乃至側面から直に其人と生活とを窮はしむるものである

**第四編** ■巴里の三十年（新刊）

ドオデエ著　後藤末雄氏譯

佛蘭西の文豪ドオデエが晩年自ら筆をとりて、如何にして文學に志せしか、如何にして文壇の人となりしか、如何にして其の三十年の文壇生活を送れるかを述べたるもの。これを文豪生ひ立ちの記と見るも可、文豪立志篇と見るも亦可也。其文壇への憧憬と初陣、その作家としての悦樂と苦み、その交遊、その日常生活の巨細を、美くしき筆に描ける所、文豪の樂屋觀として興趣極めて豐か也。

**第一編** ■トルストイ書簡集　石田三治氏譯

**第二編** ■トルストイ日記　昇曙夢氏譯

**第三編** ■ドストエーフスキイ書簡集　山村暮鳥氏譯

◀上製美本▶　一部金六十五錢　◀送料六錢▶